巴形銅器からみた弥生・古墳社会の特質
― 変革期に着目して ―

川北　奈美

1　はじめに

巴形銅器とは　巴形銅器は弥生時代後期から古墳時代中期にかけてみられる国産青銅器の飾り金具であり、中央の座と座裏の鈕、座からのびる鉤状の脚から構成される（図 1）。弥生時代後期前半から古墳時代初頭のものと、古墳時代前期後半から中期初頭の古墳出土のものに大別でき、両者の間に断絶期があるとされている [1]。本稿では、前者を「弥生タイプ」、後者を「古墳タイプ」と呼称する [2]。弥生タイプは用途不明だが、古墳タイプは出土例（三重県石山古墳、大阪府和泉黄金塚古墳、静岡県松林山古墳）から盾や靫の飾り金具に使用されたことがわかっている。

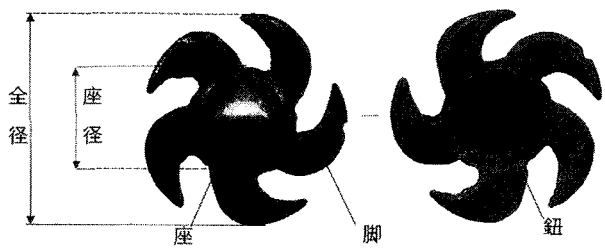


図 1　巴形銅器の各部名称（朝日遺跡例）

弥生タイプは扁平形座、半球形座、截頭円錐形座で 5・6・7・8 脚のものがあり、形態は多様である（図 2、表 1）。古墳タイプは円錐形座で 4 脚を基本とし、まれに 5 脚のものが存在する（図 3、表 2）。鈕は瘤状、橋状、棒状に分類される。脚の捩り方向は、両タイプとも右捩りと左捩りがある。巴形銅器は、北部九州で発生し、時代が下るにつれて分布の中心が畿内に集中する。国外では韓国大成洞古墳群で出土しており、倭系遺物として、両国の関係を示す資料となっている。

研究の目的　巴形銅器は、銅鐸、武器形祭器といった他の弥生青銅器や、古墳に多く副葬される鏡に比べて出土量が少ないこともあり、あまり重要な遺物と捉えられてこなかった観がある。しかし、銅鐸や武器形祭器などが古墳時代を目前に終焉を迎えるのに対し、巴形銅器はいったん断絶す

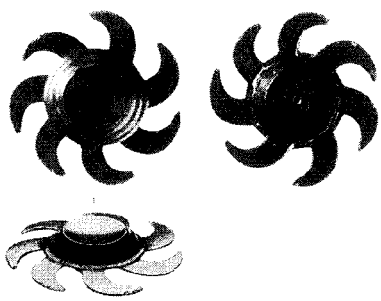


図 2　弥生タイプ巴形銅器（西山貝塚例）

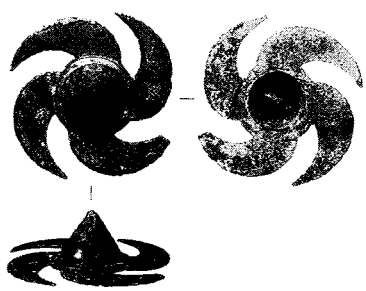


図 3　古墳タイプ巴形銅器（真土大塚山古墳例）

るとされるものの、古墳時代にまで引き継がれる。弥生・古墳時代を通して全国的に分布する巴形銅器について研究することは、弥生・古墳社会を読み解く一つの手がかりとなるだろう。

巴形銅器の存在した時期は、弥生時代～古墳時代、古墳時代前期後半～中期初頭という社会の変革期である。邪馬台国からヤマト政権へと至る激動の時代に、北部九州を中心とした巴形銅器の分布が、本州の諸地域に移っていくのはたいへん意義深い。本稿では、そうした変革期、つまり、伊都国、末盧国、奴国などの北部九州の有力な王を含めた各地の首長が畿内の連合政権へ組み入れられ、ヤマト政権が成立する時期（第一変革期）[3]と、古墳時代前期後半から中期に至る中で前方後円墳が大型化し、副葬品の種類に変化がみられる時期（第二変革期）[4]に存在した巴形銅器の出土状況や共伴関係を詳細に分析することで、弥生・古墳社会の特質を考察していきたい[5]。

研究史抄　巴形銅器の研究は古くからある。後藤守一（1920）は、それまで卍字形銅器と呼ばれていたものを巴形銅器と命名し、3 型式に分類した。ついで、森本六爾（1929）は 2 種 3 類に分類したが、この時点では、森広遺跡例（香川県、以下「遺跡」は省略）などの截頭円錐形座 7 脚のものと、一般的な古墳タイプの形態である円錐形座 4 脚や赤妻古墳例の円板座 4 脚のものしか出土しておらず、数少ない出土事例の中での考察であった。その後、鈴木恒男（1955・1959）は、増加した資料も含めて出土例を集成し、4 群に分類した。

巴形銅器の編年はそれ自体の形態から行われることが多く、研究者によってどの資料を最古のものとするかは異なる。同時に、それは起源の問題とも深く関わっている。宇佐晋一・西谷正（1959）は、スイジガイ（図 4）に巴形銅器の起源を求めるとともに、座径を全径で割って 100 を乗じた「座径指数」を導入し、客観的な指標をもって弥生時代と古墳時代のものの差を示した。すなわち、弥生時代の座径指数は古墳時代よりも大きいことを指摘し、その中でも最大の座径指数を示す井原鑓溝（いわらやりみぞ）例（福岡県）を最古としたのである。大塚初重（1964）はこのスイジガイ起源説を支持し、座径指数や脚数の多寡、脚裏綾杉文の有無を重視して、宇佐・西谷と同じく井原鑓溝例を最も遡る例と考えた。続いて 5 型式の分類を行った杉原荘介（1971）もスイジガイ起源説に同意するが、中央座が装飾的でなく、スイジガイのように 6 脚であり、脚裏が綾杉文か凹面になっている桜馬場（さくらのばば）例（佐賀県）、佐保ソウダイ例（長崎県）を最古とする点が宇佐・西谷と異なる。

一方、小田富士雄（1974）は 4 型式 6 類に分類し、右捩りの棒状鈕で、座径が小さく、座高が高い上ノ平（うえのだいら）例（長野県）を古墳時代の円錐形座に最も近いとした。また、柳田康雄（1986）は 4 型式 8 類に分類し、甕棺の型式から東宮裾例（佐賀県）を最古とした。後藤直（1986）は、以上をふまえて 5 種 8 類に分類し、巴形銅器が銅釧（こう）と鉤を組み合わせ、銅戈樋部に用いる綾杉文をも加えて創造された可能性を指摘した。よって、後藤は、半球形座瘤状鈕の中でも佐保ソウダイ例を最古のものとし、国府（こう）例（大阪府）と五村例（滋賀県）を古墳時代巴形銅器に近いとしている。さらに、高橋徹（1994）は、編年観に関しては柳田の仕事を、型式設定に関しては後藤直の仕事を評価するという立場で、それらを修正・発展させた編年を提案した。

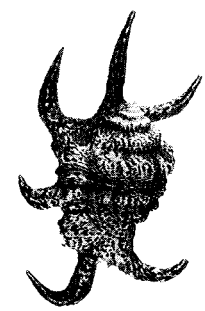


図 4　スイジガイ

祖形については研究者によって意見が分かれるが、スイジガイ起源説（岡崎敬・斎藤忠・宇佐晋一・西谷正・大塚初重・杉原荘介）が有力である。他に、ヒトデ起源説（高橋健自・後藤守一）、太陽信仰説（和田千吉・原田大六）、漢代文化の伝播（森本六爾）、鉤の呪力を強調する説（三島格）、銅釦説（後藤直）、小型仿製鏡説（高橋徹）、ゴホウラの断面から生じた文様とする説（橋口達也）などがある。

近年では、鋳型を含めた出土資料の増加に伴い、改めて体系的な分類がなされている。安藤広道（2003）は、それまでの出土事例や先行研究をふまえ、古墳時代の巴形銅器はほとんどが円錐形座4脚をもつことから、弥生時代の巴形銅器以上に定型化が進んだものとした。赤塚次郎（2004・2008）は、脚部の幅に着目して、「広脚系」と「細脚系」の二つの系列があることを提唱し、弥生時代後期巴形銅器と古墳時代前期巴形銅器が連続した系列上に位置する可能性を指摘した。田尻義了（2008・2009）は、九州大学筑紫地区出土の巴形銅器鋳型の観察から、脚部の彫り込み技法と鋳型材質によって三つに区分した。また、当鋳型を用いて森広遺跡出土巴形銅器が製作されている事実から、弥生時代後期段階に北部九州の巴形銅器が瀬戸内に流通していたことが明らかになった。

古墳時代の巴形銅器について、岩本崇（2008・2013）は、製作技術の観点から筒形銅器と比較し、系統ならびに年代的な位置づけを検討した。また、田中晋作（2000・2009）と福永伸哉（1998）は、三角縁神獣鏡や定型化した甲冑（長方板革綴短甲・三角板革綴短甲）などとの共伴関係から、巴形銅器出土古墳の性格を検討した。

このように、巴形銅器をめぐる研究は、古くは特徴的な銅器の形に着目して、祖形や起源を求めるのが主流であったが、近年は製作技術面での考察や、出土古墳の性格など政治的・社会的な観点からの検討がなされるようになった。しかし、それらの研究は、弥生時代九州、古墳時代近畿といったように地域と時代を限定したものがほとんどであり、九州、中・四国、近畿以東を比較し、弥生・古墳時代を通史的にみた研究はあまりなされていないのが現状である。また、二つの変革期に着目した研究は皆無に等しい。

2　弥生タイプと古墳タイプのつながり

両者の関係をめぐる先行研究　弥生・古墳時代を通史的にみるために、まず弥生・古墳両タイプが同一系列上にあるかどうかを検討しよう。

従来、弥生タイプと古墳タイプは、形状の相違から、別々の系譜と考えられることが多かった。小田富士雄（1974）や後藤直（1986）によって、弥生時代巴形銅器の中で古墳時代巴形銅器に最も近い例が指摘されることはあったが、現在のように出土数がそれほど多くはなかったため、弥生タイプと古墳タイプのつながりについては詳しく論じられてこなかったのである。

とはいえ、近年は、両者の関係について論じた先行研究がいくつかある。以下、おのおのの見解と、それに対する筆者の視点を述べる。

赤塚次郎（2004・2008）の見解　弥生後期巴形銅器を整理し、古墳時代前期巴形銅器と連続した系列上に位置している可能性を指摘したが、脚の数に絶対的な時期差は認めにくいとしている。本稿

では、赤塚とは別の視点で弥生・古墳両タイプの系列について検討していきたい。

田尻義了（2008・2012）の見解　古墳時代巴形銅器は北部九州の製作技法ではなく、瀬戸内以東で採用された表面鋳型に脚部を彫り込む（彫り込み技法③）方法で製作されると仮定した。筆者も、古墳時代巴形銅器の製作技法は弥生時代北部九州の巴形銅器とは異なるという意見に同意する。

安藤広道（2003）の見解　5脚の伝香川県出土の2例や松林山古墳例を挙げ、これらの円錐形座が丸みを帯びている点にも着目し、両者を定型化以前のプロトタイプと考えているが、円錐形座4脚の定型化された巴形銅器は弥生時代巴形銅器からの直接的な系譜を辿ることは難しいとしている。5脚の伝香川県出土例や松林山古墳例を定型化前の巴形銅器とみなし、その円錐形座が丸みを帯びていることを重視する点は私見と一致する。本稿では、これらを過渡的巴形銅器と称し、二つの変革期を考える上で画期をなす資料と捉えたい。

弥生・古墳両タイプが同一系列上にあることの証明　以下、先学の見解と近年の出土資料もふまえて、弥生・古墳両タイプのつながりを論じていく。2015年に鳥取県乙亥正屋敷（おつがせやしきまわり）廻遺跡で5脚右捩半球形座橋状鈕の巴形銅器が出土するなど、資料は多くの先学が分類を行った際に比べて飛躍的に増えた。弥生タイプは5・6・7・8脚で、4脚のものがないこと、古墳タイプは4脚がほとんどだが、松林山古墳例と伝香川県出土（4世紀）とされる5脚のものがあることが特筆される。5脚形式のみが弥生タイプと古墳タイプ双方にみられるという点に着目し、脚数によって弥生タイプの巴形銅器の分類を試みた結果を表1に示す。あわせて古墳タイプの一覧表も示しておく（表2）。

5脚のものは、8例中6例が本州から出土し、それらはすべて半球形座である。残りの2例は、特異な扁平形座の五丁中原（ごちょうなかばる）例（熊本県）と東宮裾例である。橋状鈕・棒状鈕巴形銅器は北部九州以外で生産されたという見方は、今や広く受け入れられているが、府中石田例（福井県）を除く本州出土の5例は橋状・棒状鈕であり、北部九州以外で製作された巴形銅器の特徴を有している。また、朝日例（愛知県）、宮平（みやだいら）例（茨城県）以外の4例（谷尻（たんじり）・乙亥正屋敷廻・荒尾南・府中石田）は、半球形座外縁に段がないタイプである。

後藤直（1986）は、半球形座外縁に段がなく、その下端と平坦な脚裏面が同一平面をなして脚の捩りは強いという特徴を持つ五村例と国府例を「Ⅲ類 半球形座橋状鈕」に分類し、古墳時代巴形銅器に近いとする。また、半球形座外縁に段はないが、座から放射状にのびる脚の形状をもつ谷尻例をⅢ'類に分類している[6]。これをふまえ、筆者は、本州出土の外縁に段がなく、脚裏が平坦で無文の単純な作りをもった5脚形式の4例も、古墳タイプにつながると考える[7]。古墳タイプ巴形銅器も、円錐体下面と平坦な脚裏面が同一平面をなし、脚裏に文様のある例がみられないからである。

5脚という形態が弥生・古墳両タイプに共通する点であり、その5脚巴形銅器が弥生時代後期後半から古墳時代初頭に至る時期に本州の各地で出土しているのは、古墳タイプ巴形銅器の分布の中心が畿内に集中していることとも深く関係していよう。

ところで、これまでの研究では、古墳時代に属する巴形銅器の中で、谷尻例だけが古墳以外から出土したものとして特別視されてきたふしがある（後藤1986、田中2000、安藤2003）。確かに、当時は古墳時代に位置づけられる巴形銅器のうち、古墳以外からの出土が報告されている例は谷尻例

表１　弥生タイプ巴形銅器一覧

番号	遺跡名	座			鈕			脚数	脚裏	捩り	遺構分類	遺構	時期	全径(cm)	座径(cm)	高さ(cm)	座径指数	備考
		扁平	半球	截頭	瘤	橋	棒											
1	井原鑓溝1(福岡)			○	○			8	綾杉	左	①	甕棺墓	弥生後期前半	15.3	9.1		59	青柳種信の記録のみ(現存せず)
2	井原鑓溝2(福岡)			○	○			8	綾杉	左	①	甕棺墓	弥生後期前半	14.1	9.4		67	青柳種信の記録のみ(現存せず)
3	井原鑓溝3(福岡)			○	○			8	綾杉	左	①	甕棺墓	弥生後期前半	16.7	10.4		62	青柳種信の記録のみ(現存せず)
4	新御堂(熊本)			○	○			8	無	右	④	包含層採集	弥生後期後半	12.3	6.4	1.5	52	
5	方保田東原(熊本)			○	○			7	凹	左	④	土坑の上	弥生後期後半	12.4	6.9	1.7	56	
6	森広A群1(香川)			○	○			7	凸線	左	④	一括埋納	弥生後期	11.6	7.0	1.6	60	九州大学筑紫地区出土鋳型で製作
7	森広A群2(香川)			○	○			7	凸線	左	④	一括埋納	弥生後期	11.6	7.0	1.6	60	九州大学筑紫地区出土鋳型で製作
8	森広A群3(香川)			○	○			7	凸線	左	④	一括埋納	弥生後期	11.6	7.0	1.6	60	九州大学筑紫地区出土鋳型で製作
9	森広B群1(香川)			○	○			7	凹	左	④	一括埋納	弥生後期	10.7	5.9	1.7	55	
10	森広B群2(香川)			○	○			7	凹	左	④	一括埋納	弥生後期	10.7	5.9	1.7	55	
11	森広B群3(香川)			○	○			7	凹	左	④	一括埋納	弥生後期	10.7	5.9	1.7	55	
12	森広B群4(香川)			○	○			7	凹	左	④	一括埋納	弥生後期	10.7	5.9	1.7	55	
13	森広B群5(香川)			○	○			7	凹	左	④	一括埋納	弥生後期	10.7	5.9	1.7	55	
14	西山貝塚(広島)			○	○			7	凹	左	④	貝塚採集	弥生後期後半	10.6	6.4	1.5	60	
15	上ノ平(長野)			○			○	7	凸線	右	④	包含層採集	弥生末～古墳初頭	10.4	5.2	2.2	50	
16	一本松(茨城)		○				○	7	無	右	③	竪穴建物跡	弥生後期末	7.5		1.3	45	脚端部渡りあり
17	唐古・鍵[復元](奈良)		◎					7	凸線	左	②	中世溝	(中世末期)	10.2				約1/10の小片
18	吉野ケ里[鋳型](佐賀)			○				7		左	④	環濠内	弥生後期～終末	14.5	7.8	1.9	54	表面鋳型
19	佐保ソウダイ1(長崎)		◎		○			6	綾杉	左	④	不明	弥生後期前半	5.9	3.0	1.0	51	
20	佐保ソウダイ2(長崎)		◎		○			6	綾杉	左	④	不明	弥生後期前半	5.9	3.0	1.0	51	
21	桜馬場1(佐賀)		◎		○			6	凸線	左	①	甕棺墓	弥生後期前半	5.6	3.1	1.3	55	座頭部無鉤　1944年発見
22	桜馬場2(佐賀)		◎		○			6	凹	左	①	甕棺墓	弥生後期前半	6.1	3.1	1.1	51	座頭部有鉤　全高2.7cm　1944年発見
23	桜馬場3(佐賀)		◎		○			6	凹	左	①	甕棺墓	弥生後期前半	6.1	3.1	1.1	51	座頭部有鉤　全高2.7cm　1944年発見
24	桜馬場4(佐賀)		◎		○			6	綾杉	左	①	甕棺墓	弥生後期前半	5.6	3.1	1.1	55	座頭部有鉤　全高2.7cm　2007年出土
25	桜馬場5(佐賀)		◎		○			6	綾杉	左	①	甕棺墓	弥生後期前半	5.6	3.1	1.1	55	座頭部有鉤　全高2.7cm　2007年出土
26	海津横馬場(福岡)		◎		○			6	凸線	左	④	布留式古段階の土坑	(古墳前期前半)	5.5	2.9	0.9	53	弥生後期からの伝世品か
27	稲佐津留(熊本)		◎		○			6	綾杉	左	③	竪穴建物跡	弥生後期	6.4	2.9	0.9	45	
28	雄城台(大分)		◎		○			6	綾杉	左	④	小ピット内	弥生後期前半？	5.5	2.9	0.9	53	
29	長瀬高浜(鳥取)		○			○		6	無	右	④	土坑	弥生後期～古墳初頭	5.6	2.9	0.8	52	
30	国府(大阪)		○			○		6	無	左	③	中世建物跡	(平安末～鎌倉初頭)	4.6	2.9	1.0		全径の値は遺存径最大
31	五村(滋賀)		○			○		6	無	左	④	包含層	弥生後期後半	6.9	3.0	1.0	43	
32	東宮裾(佐賀)	○			○			5	無	右	①	甕棺墓	弥生後期前半	4.9	2.4	0.4	49	座に櫛歯文あり
33	五丁中原(熊本)	○			○			5	無	左	③	竪穴建物跡	弥生後期後半	5.5	2.4	0.3	44	
34	谷尻(岡山)		○			○		5	無	左	③	竪穴建物跡	古墳初頭	8.0	2.9	1.3	37	過渡的巴形銅器
35	乙亥正屋敷廻(鳥取)		○			○		5	無	右	④	谷筋の跡	弥生末期～古墳初頭	9.2		1.3	38	過渡的巴形銅器
36	府中石田(福井)		○		○			5	無	左	②	旧河道SD324	弥生終末期	6.4		1.0	30	過渡的巴形銅器
37	荒尾南(岐阜)		○				○	5	無	左	②	大溝	弥生末期～古墳初頭	6.6		1.3	37	過渡的巴形銅器
38	朝日(愛知)		◎				○	5	無	左	④	包含層	弥生後期前半	5.6	3.0	1.1	54	脚裏縁部に彫り込みあり
39	宮平(茨城)		◎			○		5	凹	右	③	竪穴建物跡焼土層下	(古墳後期)	5.0	2.2	0.9	44	
40	物部(滋賀)				○			不明			③	建物床面						
41	新保(群馬)							不明	無		④	不整形土坑	弥生後期～古墳前期					脚片　穿孔あり
42	荒砥前田(群馬)							不明	無		③	建物跡	古墳初頭					脚片

各報告書をもとに作成　半球形座欄の◎：外縁に段あり　○：外縁に段なし

表2　古墳タイプ巴形銅器一覧

番号	古墳	座		脚数	捩り	出土位置	時期	全径(cm)	高さ(cm)	座径指数	備考
		円錐	円板								
1	松林山(静岡)	○		5	左	竪穴式石室	古墳前期後半	7.0	2.2	40	過渡的巴形銅器　鞆に装着
2	松林山(静岡)	○		5	左	竪穴式石室	古墳前期後半	7.0	2.1	43	過渡的巴形銅器　鞆に装着
3	松林山(静岡)	○		5	左	竪穴式石室	古墳前期後半	7.0	1.9	40	過渡的巴形銅器　鞆に装着
4	伝香川県	○		5	右			5.3		45	過渡的巴形銅器
5	伝香川県	○		5	左			5.6		53	過渡的巴形銅器
6	東大寺山(奈良)	○		4	右	粘土槨封入	古墳前期後半	9.8	2.1	36	
7	東大寺山(奈良)	○		4	右	粘土槨封入	古墳前期後半	9.7	1.8	36	
8	東大寺山(奈良)	○		4	左	粘土槨封入	古墳前期後半	9.9	2.3	39	
9	東大寺山(奈良)	○		4	左	粘土槨封入	古墳前期後半	9.8	2.5	40	
10	東大寺山(奈良)	○		4	左	粘土槨封入	古墳前期後半	9.9	2.5	40	
11	東大寺山(奈良)	○		4	左	粘土槨封入	古墳前期後半	10.1	2.3	39	
12	東大寺山(奈良)	○		4	左	粘土槨封入	古墳前期後半	10.0	2.3	39	
13	富雄丸山(奈良)	○		4	左		古墳前期後半		1.3		破損
14	佐味田宝塚(奈良)	○		4	右		古墳前期後半	12.0	2.1	32	渡りあり
15	佐味田宝塚(奈良)	○		4	―		古墳前期後半				円錐形座のみ残存
16	玉手山5号(大阪)	○		4	右		古墳前期中葉				2.7cm×1.6cmの小片
17	和泉黄金塚(大阪)	○		4	右	東槨西側	古墳前期末～中期初頭	6.1	1.4	48	盾に装着
18	和泉黄金塚(大阪)	○		4	左	東槨西側	古墳前期末～中期初頭	5.8	1.8	53	盾に装着
19	和泉黄金塚(大阪)	○		4	左	東槨西側	古墳前期末～中期初頭	5.2	1.4	50	盾に装着
20	津堂城山(大阪)	○		4	右		古墳前期末～中期初頭	6.7	1.8	49	
21	津堂城山(大阪)	○		4	右		古墳前期末～中期初頭	6.2	1.8	54	
22	津堂城山(大阪)	○		4	右		古墳前期末～中期初頭	6.0	1.5	44	
23	津堂城山(大阪)	○		4	右		古墳前期末～中期初頭	6.4	1.4	42	
24	津堂城山(大阪)	○		4	右		古墳前期末～中期初頭	5.9	1.5	49	
25	津堂城山(大阪)	○		4	右		古墳前期末～中期初頭	6.1	1.5	43	
26	津堂城山(大阪)	○		4	右		古墳前期末～中期初頭	5.1	1.3	43	
27	津堂城山(大阪)	○		4	右		古墳前期末～中期初頭	4.9	1.4	48	
28	津堂城山(大阪)	○		4	左		古墳前期末～中期初頭	5.0	1.6	45	
29	津堂城山(大阪)	○		4	左		古墳前期末～中期初頭	4.2	1.5	44	
30	交野東車塚(大阪)	○		4	右	割竹形木棺	古墳中期初頭	5.9	1.6	44	
31	交野東車塚(大阪)	○		4	右	割竹形木棺	古墳中期初頭	5.9	1.6	49	
32	交野東車塚(大阪)	○		4	左	割竹形木棺	古墳中期初頭	6.0	1.7	43	
33	石山 東槨 (三重)	○		4	右	割竹形木棺	古墳前期末～中期初頭	6.5		50	盾に装着
34	石山 東槨 (三重)	○		4	右	割竹形木棺	古墳前期末～中期初頭	6.6		50	盾に装着
35	石山 東槨 (三重)	○		4	右	割竹形木棺	古墳前期末～中期初頭	6.4		50	盾に装着
36	石山 東槨 (三重)	○		4	右	割竹形木棺	古墳前期末～中期初頭	6.0		50	盾に装着
37	石山 東槨 (三重)	○		4	右	割竹形木棺	古墳前期末～中期初頭	5.6		50	盾に装着
38	石山 東槨 (三重)	○		4	右	割竹形木棺	古墳前期末～中期初頭	5.7		51	盾に装着
39	石山 東槨 (三重)	○		4	左	割竹形木棺	古墳前期末～中期初頭	5.3		53	鞆に装着
40	石山 東槨 (三重)	○		4	右	割竹形木棺	古墳前期末～中期初頭	5.7		51	鞆に装着
41	石山 中央槨 (三重)	○		4	―	割竹形木棺	古墳前期末～中期初頭				盾に装着
42	鳥居前(京都)	○		4	右		古墳前期末～中期初頭	5.9	2.0	46	
43	鳥居前(京都)	○		4	左		古墳前期末～中期初頭	5.1	1.4	48	
44	鳥居前(京都)	○		4	左		古墳前期末～中期初頭	4.3	1.0	50	
45	鳥居前(京都)	○		4	左		古墳前期末～中期初頭	6.0	1.4	46	
46	鳥居前(京都)	○		4	左		古墳前期末～中期初頭	5.5	1.4	41	
47	鳥居前(京都)	○		4	左		古墳前期末～中期初頭	5.6	1.5	46	
48	鳥居前(京都)	○		4	左		古墳前期末～中期初頭	5.7	1.5	50	
49	鳥居前(京都)	○		4	左		古墳前期末～中期初頭	3.8	1.2	46	
50	大塚越(滋賀)	○		4	左		古墳中期前半	5.1	1.4	50	
51	大塚越(滋賀)	○		4	左		古墳中期前半	4.4	1.5	48	
52	大塚越(滋賀)	○		4	左		古墳中期前半	4.6	1.4		
53	岩内3号(和歌山)	○		4			古墳前期末～中期初頭				
54	銚子塚(静岡)	○		4			古墳前期後半				現存せず
55	八幡ヶ谷(静岡)	○		4	左	墓壙の壁際	古墳中期前半	4.0	1.2	45	
56	真土大塚山(神奈川)	○		4	左		古墳前期後半	5.2	1.7	46	
57	真土大塚山(神奈川)	○		4	左		古墳前期後半	4.3	1.7	47	
58	行者塚(兵庫)	○		4	左	西副葬品箱	古墳中期前半	11.8	2.4	37	幅約5mmの渡りあり
59	行者塚(兵庫)	○		4	左	西副葬品箱	古墳中期前半	9.7	1.6	33	
60	行者塚(兵庫)	○		4	左	西副葬品箱	古墳中期前半	9.5	1.7	42	
61	行者塚(兵庫)	○		4	左	西副葬品箱	古墳中期前半	9.0	1.8	36	
62	千足(岡山)	○		4	左		古墳中期前半	5.2	1.6	50	
63	千足(岡山)	○		4	左		古墳中期前半	5.2	1.6	50	
64	千足(岡山)	○		4	左		古墳中期前半	5.2	1.6	50	
65	千足(岡山)	○		4	左		古墳中期前半		1.6	50	
66	千足(岡山)	○		4	左		古墳中期前半				
67	千足(岡山)	○		4	左		古墳中期前半				
68	千足(岡山)			4			古墳中期前半				

69	千足(岡山)			4			古墳中期前半				
70	千足(岡山)			4			古墳中期前半				
71	千足(岡山)			4			古墳中期前半				
72	千足(岡山)			4			古墳中期前半				
73	千足(岡山)			4			古墳中期前半				
74	白鳥(山口)	○		4	左		古墳中期初頭	6.6	1.7	47	
75	白鳥(山口)	○		4	左		古墳中期初頭	5.4	1.9	47	
76	白鳥(山口)	○		4	左		古墳中期初頭				
77	白鳥(山口)	○		4	左		古墳中期初頭				
78	白鳥(山口)	○		4	左		古墳中期初頭				
79	赤妻(山口)		○	4	右	小石室	古墳中期前半	6.6		44	
80	赤妻(山口)		○	4	右	小石室	古墳中期前半	6.6		44	
81	丸隈山(福岡)	○		4	左		古墳中期前半	6.6	1.2	44	
82	丸隈山(福岡)						古墳中期前半				脚片
83	白山(岐阜)										破片
84	白山(岐阜)										破片
85	鷹之巣大塚(岐阜)	○		4	左			6.4	1.0	51	
86	鷹之巣大塚(岐阜)										
87	鷹之巣大塚(岐阜)										
88	鷹之巣大塚(岐阜)										
89	鷹之巣大塚(岐阜)										
90	大成洞2号(韓国)	○		4	左		古墳前期後半	6.1	1.7		
91	大成洞2号(韓国)	○		4	左		古墳前期後半				
92	大成洞13号(韓国)	○		4	右	主槨	古墳前期前半	12.0	2.5	34	
93	大成洞13号(韓国)	○		4	右	主槨	古墳前期前半	12.0	2.5	34	
94	大成洞13号(韓国)	○		4	右	主槨	古墳前期前半	12.0	2.5	34	
95	大成洞13号(韓国)	○		4	右	主槨	古墳前期前半	12.0	2.5	34	
96	大成洞13号(韓国)	○		4	右	主槨	古墳前期前半	12.0	2.5	34	
97	大成洞13号(韓国)					主槨	古墳前期前半				脚片
98	大成洞23号(韓国)	○					古墳前期後半				破片
99	大成洞23号(韓国)	○					古墳前期後半				

各報告書をもとに作成。報告書には座径が記載されていない資料が多いため、座径指数は写真や実測図の比率から求めた。

以外になかった。巴形銅器が出土した谷尻遺跡の遺構は、周溝やベッド状遺構を有する突出した大型竪穴建物跡であり、他の出土遺跡にはない特異な構造である。加えて、谷尻遺跡出土の巴形銅器は、弥生タイプのうち裏面に有機物の付着痕跡が報告されている唯一の例であり、このことは巴形銅器が何かに装着されていた証拠となる。古墳タイプには盾や靫に装着した状態で発見された 3 例（石山古墳・和泉黄金塚古墳・松林山古墳）以外にも、裏面に有機物が付着している例（東大寺山古墳など）があり、器物に着装されていたことを示すという点において、谷尻例は古墳に副葬された巴形銅器（古墳タイプ）と共通している。

しかし、同じく 5 脚半球形座の荒尾南例、乙亥正屋敷廻例の時期は弥生時代末期～古墳時代初頭、府中石田例の時期は弥生時代終末期と報告されており、谷尻例と同様に過渡的様相を呈する資料といえる。谷尻遺跡の報告書では、弥生時代 50～64%、古墳時代 33～55%とされる座径指数の観点から、座径指数 36～37%の谷尻例は古墳時代に属するとしたが、宇佐・西谷の提唱した座径指数の視点を導入すれば、荒尾南例、乙亥正屋敷廻例、府中石田例も、谷尻例と同じく座径指数 40%を下回り、古墳時代に属することになる（表 1）。特に荒尾南例は、弥生時代後期前半とされる朝日例や、巴形銅器の形態的組列による編年と遺構の時期が一致しない国府例や宮平例とは異なり、遺構の時期が弥生時代末期～古墳時代初頭という変革期に位置づけられる。

また、松林山古墳は 4 世紀後半に築造され、巴形銅器が出土した古墳の中でも比較的古いことや、

5 脚形式で円錐形座がやや丸みを帯び、外縁に段がないことから、弥生タイプの系譜を引いていると思われる。5 脚という形態は古墳タイプでは特異であるが、鞆の腐蝕物の中に混じっていたことから、鞆に装着した状態で発見された石山古墳における用途と一致するとみてよい。つまり、古墳タイプの初期段階である 5 脚の松林山古墳巴形銅器については、定型化した円錐形座 4 脚巴形銅器と同様の使用法が想定でき、こうした点も古墳タイプ定型化前と定型化後の巴形銅器のつながりを示す。

なお、松林山古墳には、漢鏡 5 期（1 世紀後半代）の四葉座 I 式内行花文鏡[8]が副葬されている。これが踏み返し鏡でないとすれば、製作から副葬まで 300 年以上の時間幅があり、長期の伝世が想定される[9]。舶載鏡と国産の巴形銅器を一元的に扱うことは適切ではないかもしれないが、古墳出土の遺物は、長期保有や伝世によって製作年代と副葬年代に大きな開きが生じる可能性を考慮すると、巴形銅器においても、鏡ほどの長期間の伝世はないにせよ、古い時期に製作されたものが 4 世紀後半になって副葬されたと考えることもできる。ここから、5 脚の松林山古墳巴形銅器は、見かけ上の断絶期間に生産された可能性が想定できる。さらに、松林山古墳系列の埴輪は中央からの直接伝播という廣瀬覚（2015）の見解も興味深い。松林山古墳出土巴形銅器も畿内から直接伝播したと捉えれば、畿内ではない当古墳から定型化前の巴形銅器が出土していることの説明にもなるだろう。また、この古墳からは、巴形銅器の祖形として有力なスイジガイ製の貝釧が出土していることも特筆される。

以上のように、弥生タイプ 5 脚巴形銅器は本州から出土したものが多く、すべて半球形座をもつ。そのうち 4 例（谷尻・乙亥正屋敷廻・荒尾南・府中石田）は外縁に段がなく脚裏が平坦であり、古墳

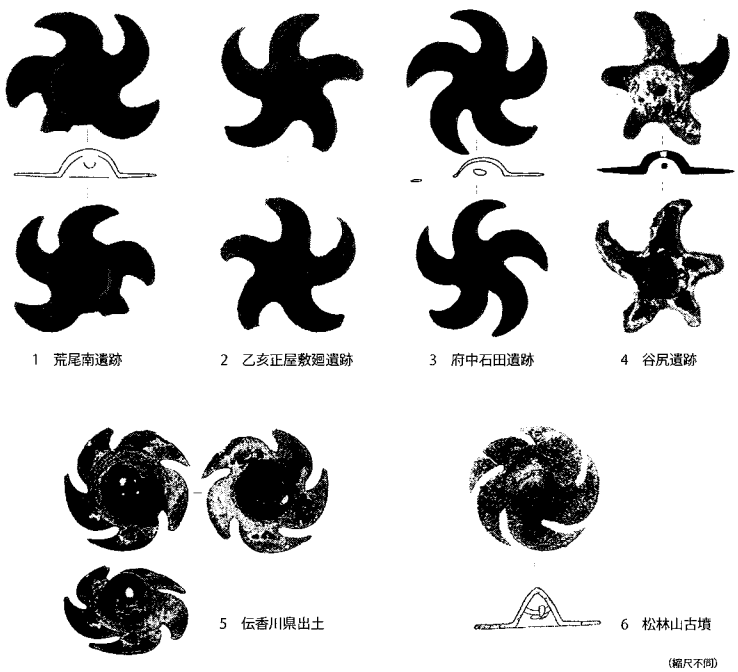


図 5 過渡的巴形銅器

タイプとのつながりが想定できる。型式学的にも、これらは出現期の北部九州産巴形銅器とは程遠く、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて北部九州から本州に巴形銅器のデザインが伝播し、簡略化が行われた時期の資料であることがわかる。加えて、出土遺構の時期や、座径指数といった客観的な指標からも、弥生時代から古墳時代への変革期に存在した巴形銅器であることが立証できる。本州出土半球形座 5 脚巴形銅器（特に上記の 4 例）と松林山古墳巴形銅器、伝香川県出土巴形銅器は古墳タイプ円錐形座 4 脚に定型化する前段階の資料であり、過渡的巴形銅器 [10] であったと考えられよう（図 5）。これにより、弥生・古墳両タイプは同一系列上に位置づけられる。

出現と伝播 —弥生タイプから古墳タイプへ—　改めて表 1 を見ると、6 脚のものは鳥取県長瀬高浜例、大阪府国府例、滋賀県五村例以外、すべて九州出土の半球形座外縁に段を有する瘤状鈕の巴形銅器であることに気づく。また、脚裏に綾杉文のある例が多いこともわかる。これらは、瘤状の鈕をもつ半球形の銅釦に脚をつけたものと言うにふさわしい形態をしている [11]。6 脚で外縁に段を有し、綾杉文を施した巴形銅器が九州でのみ出土しているという事実は、巴形銅器が、製作技術的には銅釦を意識しつつも、6 本の突起をもち、綾杉状をなして外唇部に移行する襞を特徴とするスイジガイをモチーフに作られたことの傍証となると思われる。一方で、前述した本州出土の外縁に段がない 5 脚形式の 4 例は、銅釦を意識して製作したものではなく、大まかに鉤状の脚を強調して製作した簡略化の結果と考えられる。

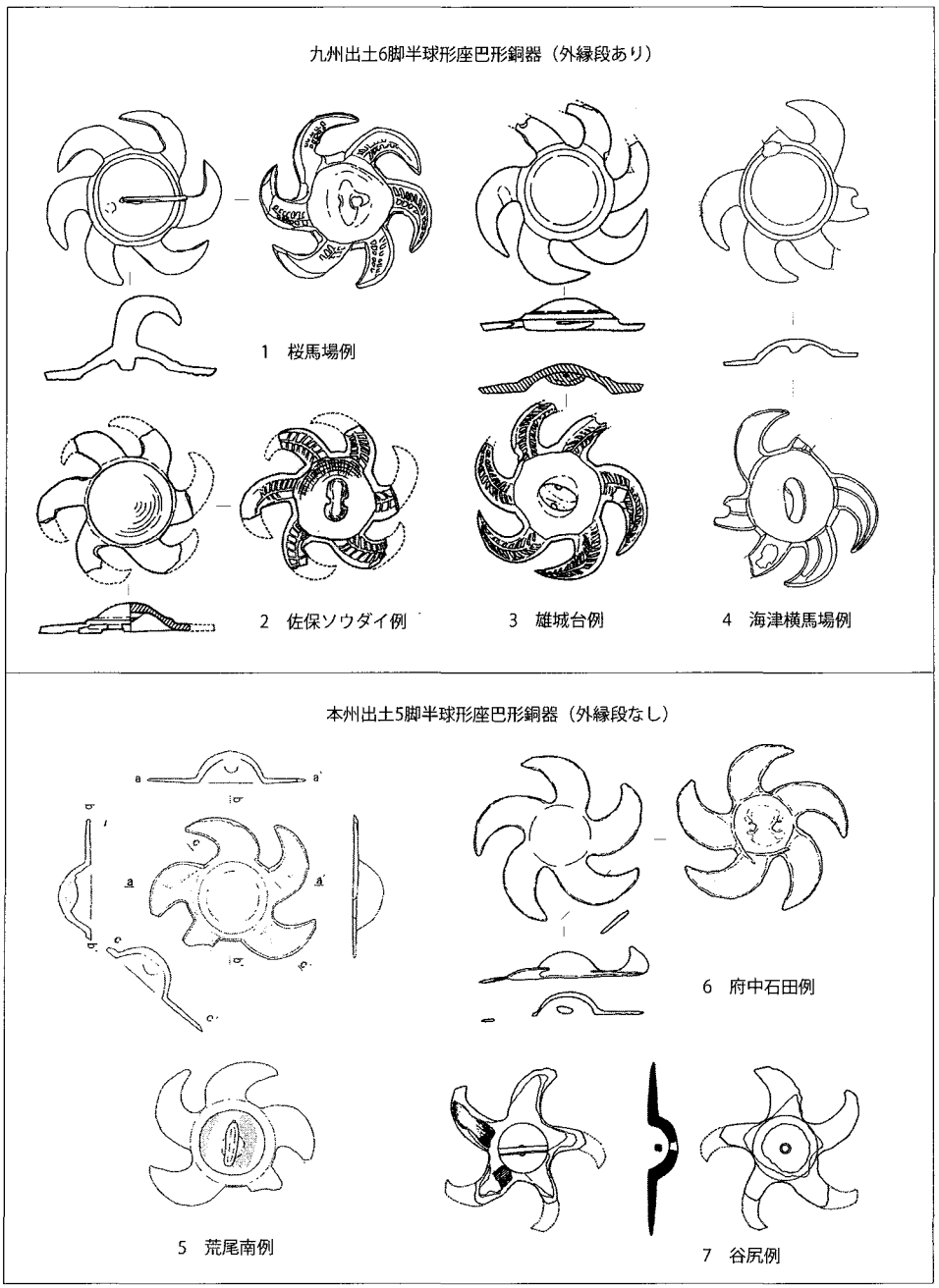
このように、5 脚形式と 6 脚形式の弥生タイプ巴形銅器を見比べると、6 脚のものは、九州出土で外縁に段があり（すべて半球形座）、脚裏に文様のある例が多い。一方、5 脚のものは、先述したように、九州出土の扁平形座の 2 例以外、すべて本州出土の半球形座であり、脚裏が無文で外縁に段がなく、大まかな巴形の脚の形状を捉えた例が多いことがわかる。言い換えれば、古相を示す出現期の巴形銅器は 6 脚形式に多く、簡略化が進んだ新相を示す巴形銅器は 5 脚形式に多い。こうした変遷は、九州から本州へという巴形銅器の伝播のありかたとも一致し、その過程で製作意識の変化があったことが読み取れる。6 脚の巴形銅器に見られる形態的特徴と比較すると、5 脚形式の巴形銅器には簡略化したものが多いことは、先に論じたように、本州出土半球形座 5 脚巴形銅器が古墳タイプにつながる過渡的巴形銅器であることの裏付けとなるだろう [12]。

以上、近年出土した巴形銅器をふまえて検討を行うことで、脚の数に絶対的な時期差は認めにくいとする赤塚（2004）とは別の観点から、両タイプが同一系列上にあることを示した。

次に、現状での分布をみると、第一変革期には荒尾南（東海）、乙亥正屋敷廻（山陰）、府中石田（北陸）、谷尻（吉備）といったように、弥生タイプ巴形銅器は諸地域に広がっていることがわかる（図 7）。一方、古墳タイプ巴形銅器は明らかに畿内を中心に分布している（図 8）。そこで、古墳タイプの鋳型が出土していないため、推論になるが、その製作地についても考えてみたい。これら 4 例と松林山古墳例、伝香川県出土例を過渡的巴形銅器と位置づけたが、弥生タイプの前者から古墳タイプの後者への変遷はいかなるものであろうか。

この問題を考察する上で、注目すべき現象がある。纒向遺跡では東海、山陰、北陸、吉備をはじめとした各地からの搬入土器の出土比率が全体の 15%を占めているのである。これは、当地域の

人々の移動や交流が活発であったことを物語る[13]。関川尚功（1976）は、土器の流入という現象は纒向遺跡のみではなく、畿内各地の同時期の遺跡でも広くみられるとした。そして、土器の搬入などの事象が単なる交易に限定されるものでなく、頻繁な人的移動があったことや、こうした移動が土器の製作者ばかりでなく、広範囲の人々を含んでいたと考えられることを指摘した。



（縮尺不同）

図6　5脚・6脚半球形座巴形銅器の比較

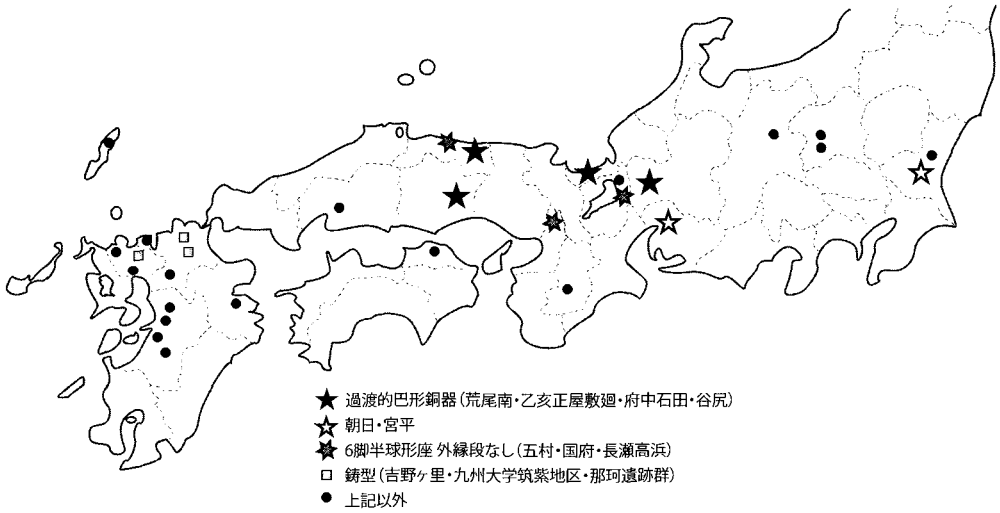


図7　弥生タイプ巴形銅器の分布

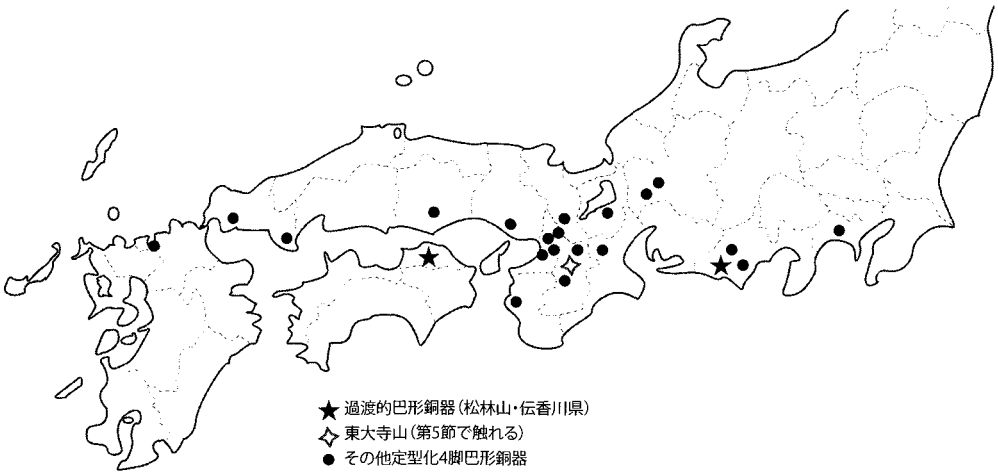


図8　古墳タイプ巴形銅器の分布

表3　巴形銅器の分類と編年

弥生時代	後期	出現期	弥生タイプ	北部九州巴形銅器（桜馬場・佐保ソウダイなど）	
		第一変革期		荒尾南・乙亥正屋敷廻・府中石田・谷尻	過渡的巴形銅器
古墳時代	前期	見かけ上の断絶期	古墳タイプ	松林山※・伝香川県・（纏向巴形石製品）	
		第二変革期		定型化4脚古墳タイプ（一部は断絶期に製作された可能性あり）	
	中期			※松林山古墳の築造時期は前期後半の第二変革期にあたる	

上述した巴形銅器の 4 例に、弥生時代後期前半とされる朝日例も加えると、これらの巴形銅器の出土地域は、搬入土器のほとんどを占める東海、山陰、北陸、吉備と一致する。ただし、土器の場合と異なり、東海、山陰、北陸、吉備で製作されたと判明する巴形銅器が纒向遺跡（畿内）で発見されたわけではない。だが、第一変革期には、簡略化した 5 脚半球形座巴形銅器がこれら諸地域に存在していたことは事実である。さらに、考古遺物の分布はあくまでも現在の出土状況を示すものであって、それらは、かつて存在していたほんの一部にすぎない。金属製品の性質上、鋳直されて別の製品になってしまったものも多かろう。現在知られていない巴形銅器の存在を前提とし、土器の製作者に限らず頻繁な人的移動があったという関川の指摘も考慮に入れると、当該時期に本州の各地域で生産された巴形銅器が畿内に流通していた蓋然性は高い。

また、近年、纒向遺跡から布留 0 式期とされる 4 突起右捩りの巴形石製品（未成品）が出土し、断絶期に位置づけられる資料と目されている（森 2014）[14]。これについて、北條芳隆（2014）は、青銅製品と石製品の用途は部分的に競合する関係にあるとし、本石製品が試作品であった可能性を指摘する。材質は異なるものの、巴形石製品が生み出される素地となった巴形銅器は纒向遺跡にもたらされていたと考えられる。

以上から、纒向遺跡を含む畿内[15]には、東海、山陰、北陸、吉備といった諸地域の巴形銅器が流通し、それらをもとに、畿内で古墳タイプが集中的に生産されるようになったと推定したい[16]。弥生タイプから古墳タイプへ至る間の製作地については、現状では資料が乏しく確定できないが、ヤマト政権が成立するにあたって諸地域の文物を取り入れていたことが、巴形銅器の型式変化と分布からも想定できるのである[17]。

3　弥生タイプの出土遺構からみた第一変革期

出土遺構による分類　古墳タイプは古墳からしか出土しないが、弥生タイプ巴形銅器は甕棺墓、建物跡[18]、溝などさまざまな遺構から出土する。そこで、後者を出土遺構によって分類し、巴形銅器の性格を考察してみよう。同時に、弥生時代から古墳時代への第一変革期に位置づけられる過渡的巴形銅器に焦点を当て、他の巴形銅器との比較を通してその様相に迫りたい。

本稿では、巴形銅器出土遺構を、①甕棺墓、②溝、③建物跡、④その他、の四つに分類した（表 1 の遺構分類参照。出土遺構が不明なものや偶然採集されたものなどは、その他に含めた）。

甕棺墓　甕棺墓出土の巴形銅器は、副葬品の一つとして鏡や刀剣等と共伴し、末盧国や伊都国では王の所持品であったことが窺える。一方、建物跡や溝から出土する巴形銅器はいずれも単独で発見される。出現期のものは、北部九州の甕棺墓の副葬品であり、東方へ伝播して時期が新しくなるにつれ、単独で集落遺跡から出土するようになる、というのが大まかな流れのようにみえる。森本六爾（1929）は、銅矛銅剣の出土事例を援用し、巴形銅器においても甕棺墓出土のものは単独出土のものに比べて古いとする。この見解は大筋では認められるが、形態的に古相を呈する佐保ソウダイ例や稲佐津留例、雄城台例など、後期前半と考えられつつも出土遺構が不明なものや、建物跡、小ピットから単独で出土するものが副葬・廃棄・埋納された時期は、厳密にはわかっていない。

溝　溝出土の巴形銅器は、中世の素掘溝から二次的に出土した唐古・鍵例を除き、第一変革期の巴形銅器（荒尾南・府中石田）であることがわかる。

荒尾南遺跡では、農具の他に木製の威儀具や祭祀具といった非日常品も出土していることから、別の場所で祭祀儀礼に使用したものを廃棄したと想定されている（鷲見ほか 2014）。巴形銅器が出土した弥生時代末～古墳時代前期の大溝周辺には、竪穴建物跡や前方後方形周溝墓がある。巴形銅器は、祭祀に用いられたのか葬送儀礼に用いられたのか明らかでないが、木製祭祀具のように別の場所で使用された後、溝に廃棄されたのだろう。

府中石田遺跡においても、巴形銅器が出土した旧河道の付近には方形周溝墓や建物があり、荒尾南例と同じく、別の場所で使用されていたものが旧河道に廃棄されたと考えられる。

建物跡　谷尻遺跡で巴形銅器が出土した 191 号住居跡は、他の建物跡出土に分類される遺跡のものに比べ、群を抜いて大型であるだけでなく、遺跡内でも最大規模の建物跡である点で特異である。この建物跡については、さまざまな解釈がある。

近藤義郎（1983）は、著しく大型の住居であることに加えて、周溝をそなえ、巴形銅器を居住地にもつことから、吉備山間部の首長居宅の有力候補としている。また、橋本博文（2001）は、一辺 7m 以上、床面積で 50 ㎡以上を「大型住居」と定義し、谷尻遺跡 191 号住居跡を一例に、大型住居の構造上の特徴（壁柱穴を持ち、ベッド状遺構を備えるなど）と、古墳の副葬品に見られるような特殊な遺物、威信財等を出土したものが散見することを指摘した。ここで「住居」と呼んでいることからもわかるように、橋本は当該建物を、階層差を示す住居と捉えた。一方、穂積裕昌（2012）は、五角形を呈した外周を画する溝に特殊な存在形態を見出し、これが喪葬遺跡とすると、遺体を保管した喪屋の可能性もあると想定している。

近年、竪穴建物をめぐる研究の気運が高まり、窯業遺跡、鍛冶工房、喪屋、馬小屋など、さまざまな役割が考察されるようになってきた[19]。従来、何気なく住居と考えられてきた建物跡の性格について、見直しを図る時期に来ているといってよい。大型建物跡であるからといって、安易に豪族居館と即断するのは問題があるだろう。例えば、追ヶ谷戸（おいがやと）遺跡の報告書では、ベッド状の壇を屍床、焼土を儀礼や調理を含む屋内での焚火行為とし、本遺跡の竪穴建物の性格について喪屋と想定している（鳩山町遺跡調査会・鳩山町教育委員会 2008）。

この見解が正しいとすれば、ベッド状遺構は、橋本が挙げるような大型住居の特徴であるだけでなく、喪屋の特徴でもあるわけである。よって、ベッド状遺構を直ちに屍床と判断することはできないものの、穂積が指摘した溝による囲繞施設の存在も加味して検討すると、やはり谷尻遺跡の大型建物は喪屋である可能性が高いと考えられる。

なお、前述したように、谷尻例は裏面に有機物が付着している。この点から使用方法を推測すると、本例は建物の壁やその付近に置かれた盾に装着されていた可能性がある。

建物跡出土巴形銅器は他に 5 例あり（宮平例・国府例の遺構の時期は、巴形銅器が存在した時期と一致しない）、五丁中原例はベッド状遺構を備え、一本松例は橋本の「大型住居」の定義を満たしている点で谷尻例と共通する。また、同一遺跡内において、巴形銅器は 1 軒の建物跡から 1 点のみ出

土するという点も同様である。巴形銅器が出土した建物跡が、遺跡内においてどのような性格を持っていたかは不明であるが、谷尻例以外の建物跡は遺跡内で最大規模の建物というわけではない。そうした意味でも、谷尻例の特異性が窺えるのである。

その他　乙亥正屋敷廻例は、報告書が未刊行であるが、建物跡のない谷筋の跡から出土したとされる[20]。本例と谷尻例は、座の穿孔の有無や脚の捩り方向の差異はあるけれども、座径の大きさ、高さ、脚の捩る角度、鈕の形態が類似している。この 2 例をもって「中国地方型」と称するのは早計だが、形態の類似した巴形銅器が近接した地域から出土し、その出土遺構が、一方は建物跡、もう一方は谷筋と異なる点は興味深い。

小　結　以上、出土遺構の分類から、荒尾南例、府中石田例、谷尻例、乙亥正屋敷廻例といった過渡的巴形銅器を中心に、その様相を見てきた。過渡期に位置づけられる巴形銅器（弥生タイプ）は、別の場所で使用していたものを溝に廃棄したり、喪屋で使用していたりと、使用形態に地域差があったと考えられる。

古墳タイプは盾や靫に装着され、刀剣や甲冑と重なって出土することから、武器・武具と密接な関わりをもつことがわかっている。しかし、弥生タイプの出土状況からは武器・武具とのつながりがあまり見出せなかった。さらに、墓の副葬品と断言できる出土状況を示すものは、出現期巴形銅器の北部九州甕棺墓副葬の 3 例のみである[21]。

形態上つながりをもつ弥生タイプと古墳タイプの用途面における変化、すなわち、第一変革期の巴形銅器が、第二変革期の巴形銅器では武器・武具と密接な関係をもって古墳に副葬されるに至った背景には何があったのだろうか。次節以降、その社会的背景についても言及していきたい。

4　古墳タイプの出土状況と共伴遺物からみた第二変革期

先行研究　古墳タイプ巴形銅器については、これまで、主に副葬品の共伴関係に着目したマクロな視点での考察がなされており、かつ畿内の古墳に限定した分析が多かった。

田中晋作（2000・2009）は、巴形銅器と三角縁神獣鏡、甲冑、石製模造品との共伴関係は、古墳時代前期後半から中期前半にかけて、大和盆地東南部の勢力、佐紀・馬見古墳群の勢力、百舌鳥・古市古墳群の勢力の間に起こった政権内の主導権をめぐる確執の中で、キャスティングボートを握った複数の勢力の存在により顕在化した現象と考えた。そして、古墳タイプの巴形銅器を弥生タイプとは別個のものと捉え、この段階で新たに台頭する勢力がもった物品であり、一部は朝鮮半島東南部で製作された可能性もあるとした。

キャスティングボートという考えは興味深いが、田中の見解は弥生タイプと古墳タイプのつながりを認める筆者の立場とは異なる。また、一口に古墳出土と言っても、出土位置によって意味合いが異なっていた可能性がある。出土位置が不明なものは副葬品の配置方法を探ることができないが、出土状況が判明しているものに関しては、ミクロな視点でも分析がなされるべきであろう。

ただし、巴形銅器に限定せず、鏡や武器などの副葬品配列に関する先行研究ならば多数存在する（今尾 1991、藤田 1993 ほか）。本節では、先学の研究に導かれつつ、巴形銅器出土古墳に焦点を当

て、各古墳内での巴形銅器の配置方法や、畿外の古墳も含めた副葬品の共伴関係を検討する。なお、古墳の時期については『前方後円墳集成』（近藤義郎編 1991・1992・1994）編年（広瀬和雄の 10 期編年）を用いる。

分析と考察　巴形銅器を副葬する古墳の中で築造時期が古いのは、玉手山 5 号墳、松林山古墳、東大寺山古墳、富雄丸山古墳、佐味田宝塚古墳など、4 世紀中頃～後半頃に位置づけられるものである。そのうち、巴形銅器の詳細な出土状況が判明するのは、松林山古墳と東大寺山古墳であるが、東大寺山古墳は盗掘を受けているため、武器・武具以外の遺物の原位置は明確ではない。

巴形銅器は、松林山古墳では、武器を中心に副葬した南室から靫の腐蝕物に混じって出土した。また、東大寺山古墳では盾に着装されていたとみられ、大刀と重なって粘土槨に封入されていた。ここから、古墳タイプは初期段階ですでに武器・武具と密接な関係をもっていたといえる。以下、副葬品配列をめぐる先行研究も参考にしつつ、各古墳の出土状況の意味について検討する。

東大寺山古墳では、巴形銅器や大刀などは、粘土槨被覆の最終段階で棺外に副葬されたとされ、粘土で完全に棺を覆うまでに一度作業を中断していることがわかる。副葬品の配列について、今尾文昭（1991）は、棺内への配列段階（第一段階）、棺外への配列段階（第二段階）、竪穴式石室外・粘土槨外への配列段階（第三段階）の三つの段階が設定できるとする。同じく 3 期の古墳であっても、巴形銅器を他の遺物と同様に石室内に副葬する松林山古墳例と、粘土を積み上げる作業を中断して、大刀などとともに封入する東大寺山古墳例があり、配列段階に差がみられる。

また、石山古墳は粘土槨であるが、巴形銅器は、東大寺山古墳のように粘土槨に封入されるわけではなく、盾や靫に装着された状態で、いずれも棺内に副葬されている。一方、巴形銅器が着装されていない盾は、東槨の埋葬施設を取り囲むように棺外で出土した。棺内に入れる盾と棺外に配置する盾があり、意図的に副葬品を配列したことが窺える。なお、中央槨においては、巴形銅器付きの盾は、その出土位置から被葬者に被せられたと推定される。

一般に、棺内出土遺物は棺外出土遺物よりも被葬者にとって重要なものと考えられている。藤田和尊（1993）は、鏡などの主要遺物が、被葬者の位置から離れて副葬されればされるほど、その古墳の副葬形態は他に卓越していることを示すとした。巴形銅器の場合もはたしてそうであろうか。

穂積裕昌（2012）は、墳頂部方形埴輪列における器財埴輪や、盾に装着された巴形銅器の方向に着目して、表面を外側に向けるのは、悪霊が埋葬施設へ侵入することを防ぎ、被葬者を護ることを意味し、内側に向けるのは、被葬者が悪霊化するのを防ぐこと（鎮魂）を意味するとしている。特に、石山古墳中央槨北部において、下（遺体側）に向けて置かれた盾や、和泉黄金塚古墳の東槨西側に表面を外側（中央槨の被葬者側）に向けて立てかけられた盾から、直接当該被葬者に向けられたとみられる事例（前者）と、先行被葬者に向けられたとみられる事例（後者）があることを指摘した点は重要である。この指摘によって、従来の悪霊を退けるという辟邪観念に加え、被葬者自身に対する鎮魂の作用（悪霊化の防御）の意味付けがなされた。

よって、巴形銅器（盾）と被葬者の位置関係は、当遺物が被葬者にとって重要か否かを意味するというより、むしろ、辟邪や鎮魂の作用とその強弱を意味するのではなかろうか。石山古墳中央槨

の事例のように、被葬者の上に、巴形銅器が装着された盾が下向きに置かれていれば、被葬者を鎮魂する（悪霊化するのを防ぐ）といった意識が非常に強かったと考えられる。

高橋克壽（1993）は、4 世紀後半のある時期から、墳頂方形埴輪列の中に蓋や盾の器財埴輪が登場してくることを指摘し、埴輪を用いて古墳の聖域を守ろうとする意識がこの時期に最も強くなったことが読み取れるとしている。また、菱田哲郎（1993）は、石山古墳において盾形埴輪・靫形埴輪の表面が列の外側に向けられていたことや、実物の革製盾と刀剣類などが東槨の埋葬主体を取り囲むように置かれていたことに着目し、同じく、この時代に外敵から死者を護る意識が強く働いていたと指摘する。

古墳タイプ巴形銅器が古墳に副葬されるようになるのも、古墳時代前期後半～中期初頭という、辟邪思想が最も強まった時期である。巴形銅器も器財埴輪や他の副葬品と同様に、被葬者を護る、あるいは被葬者が悪霊化するのを防ぐ、といった当時代の死生観を反映する遺物であったと考えられる。石山古墳と行者塚古墳は、家形埴輪・囲形埴輪を主墳丘に付設された施設に並べる点でも共通しており、巴形銅器出土古墳は、古墳の構造や埴輪、その他共伴遺物に類似性がみられるものが多い[22]。ただし、行者塚古墳の巴形銅器は、大量の鉄製品とともに副葬品箱に収められており、被葬者に直接向けられた石山古墳中央槨の例とは配置方法が異なる[23]。

前期後半から中期に至る第二変革期には、大型の前方後円墳が奈良盆地東南部（大和（おおやまと）・柳本古墳群）から奈良盆地北部（佐紀古墳群）、河内（古市・百舌鳥古墳群）へと移動し、また、朝鮮半島との交渉が活発化した[24]。このような社会的背景のもと、辟邪／鎮魂の思想が体現され、古墳タイプ巴形銅器は武器・武具と密接な関わりをもって副葬されるようになったのであろう。

その後、古墳タイプは丸隈山古墳や千足古墳、赤妻古墳などの西方へ広がりをみせる。丸隈山古墳から盾形埴輪が出土したことや、千足古墳の石障に直弧文[25]が刻まれていることから、これまで見てきた近畿の古墳のように、辟邪／鎮魂を表現しているとみられる。巴形銅器出土古墳の中で最も新しい時期の赤妻古墳において、古墳タイプで唯一の形態である円板座巴形銅器（座中央部に穿孔あり）に加え、有孔貝製品（ツキヒガイ）が出土していることは、巴形銅器と貝の関係を考える上で示唆に富んでいる。

有孔貝製品は古墳時代中期初頭から中期後葉に存在し、盾や靫などの武具に取り付けられたと考えられている（鈴木 2012）。赤妻古墳が築造された時期には、ツキヒガイの有孔貝製品が、盾や靫に装着する巴形銅器の代用品としての役割を果たしていたと思われる。ツキヒガイは房総半島から九州にかけて分布することから（波部・小菅 1967）、南海産の貝であるスイジガイよりも手軽に入手できたのであろう。赤妻古墳巴形銅器の座裏には鈕がなく、座の中央に孔があることも有孔貝製品と類似している。赤妻古墳例は、巴形銅器が有孔貝製品に取って代わられる直前の古墳タイプの最終形態であったといえる[26]。

以上、先学の研究を参考に、古墳タイプ巴形銅器の出土状況や共伴遺物を検討した。元々は九州で生まれた巴形銅器が、本州へ伝播して 4 脚・円錐形座へと形を変え、今度は九州（丸隈山古墳）にそのデザインが伝播するという逆輸入のような過程を経ているのは、たいへん興味深い現象であ

る。第二変革期には、辟邪や鎮魂の思想が強まり、巴形銅器もそれを体現する遺物の一つとして、古墳に副葬されるようになったと考えられる。

ただし、松林山古墳例などの古墳タイプ過渡的巴形銅器が断絶期に製作され、製作年代と副葬年代に大きな差が生じるとすれば、古墳タイプ成立の背景について別途検討する必要がある。次節では、この問題に関して、靫や盾など巴形銅器を着装した器物をもとに考察していく。また、韓国大成洞古墳群で出土した巴形銅器を含む倭系遺物も勘案して、断絶期について再検討を行う。

5　断絶期の再検討 —着装器物を中心に—

従来、古墳タイプについては、政権の新興勢力との関係性が重視され、前期後半になって新たに登場する遺物とみなされてきた（福永 1998、田中 2000）。現状では、古墳タイプは前期前半に築造された古墳から出土していないため、副葬年代を前期後半からと考えるのは正しいが、製作年代がそれをどれほど遡るのかは不明である。

出土状況から古墳タイプの用途が判明するのは、松林山古墳、石山古墳、和泉黄金塚古墳の 3 例であることはすでに述べた。ここで、時期と着装器物を照らし合わせると、3 期の松林山古墳は靫、4 期の石山古墳は靫と盾の両方、同じく 4 期の和泉黄金塚古墳は盾である。この中で最も古く、かつ過渡的巴形銅器でもある松林山古墳の巴形銅器を装着した器物が靫であったことに注目したい。

古墳タイプ定型化前の松林山古墳例がすでに靫に着装されていることは（実際には腐蝕物に混じって出土）、古墳タイプが靫に着装されることを前提に生産が開始されたことを示しているように思われる。

杉井健（2013）によると、（飾られる）靫は、大和古墳群を造営した前期の中央政権によって、一方、（飾られる）革盾は、古市・百舌鳥古墳群を造営した中期の中央政権によって生み出された（漆塗り武具が中期になって靫から革盾へと変更された）という [27]。これをふまえると、石山古墳出土の巴形銅器は、靫と盾の両方に装着されていたことから、副葬状況が前期と中期の境目の様相を呈していることが窺えるのである。

靫は矢を入れる容器であり、表 4 を見ると、ほとんどの古墳で鏃と共伴していることがわかる。中でも、東大寺山古墳の銅鏃 261 個と鉄鏃 70 個、松林山古墳の銅鏃 80 個という数の多さは目を引く。特に銅鏃は、巴形銅器と同様に青銅製品であるだけに、古墳タイプの生産を考える上で欠かせない存在であろう。

松木武彦（1991）は、前期古墳副葬鏃を A 類と B 類に分け、前者が弥生系の副葬鏃と位置づけられるのに対して、後者は数十本という極めて多くの本数を束または靫内にまとめるという副葬形態の考案とともに、弥生終末期に新たに創出されたとする [28]。そして、B 類銅鏃の大量生産は、大型仿製鏡鋳造の盛行、やや遅れるが筒形銅器や巴形銅器の製作開始などと時間的にほぼ軌を一にしていると指摘し、密接な関係を考えた上で、200 本以上という群を抜く本数の銅鏃をもつメスリ山古墳、東大寺山古墳と、仿製鏡の副葬数で卓越する紫金山古墳、新山古墳、佐味田宝塚古墳の例から、青銅製威信財の生産と配布を掌握していた最大の勢力は畿内の中央政権であった可能性が大きいと

した。

以上をふまえ、古墳タイプの製作は、松木分類による B 類銅鏃の生産が軌道に乗り始めた時期か、それに先立つ時期に、靫に装着することを前提として、第一変革期に諸地域に分布していた弥生タイプの過渡的巴形銅器をもとに、畿内で集中的に行われるようになったと考えたい。つまり、従来は断絶期とされてきた巴形銅器の空白期間に、初期段階の古墳タイプ（松林山古墳例など）は、前期古墳の副葬品の一つとして、靫や鏃の生産からさほど時期を隔てることなく生産され始めた可能性がある。第 2 節でも述べたように、松林山古墳には鏡など古い遺物が含まれており、前期前半に作られた巴形銅器が前期後半になって副葬されたとしても不思議ではない。

上記 3 例（松林山古墳・石山古墳・和泉黄金塚古墳）の着装器物と古墳の時期は、杉井（2013）が指摘する前期－靫から中期－革盾という変遷と一致する。ところが、松林山古墳と同じく 3 期の東大寺山古墳の巴形銅器は、木製の盾や革製の盾に装着したと推測されている。この盾が革製であったならば、古墳時代前期の段階ですでに革盾が存在していたことになり、杉井（2013）や橋本達也（2001）の論は見直される必要がある。そこで、国外の事例にも視野を広げ、4 世紀前半の築造とされる韓国大成洞 13 号墳の巴形銅器が木製の盾 2 点に装着したと推定されている（申敬澈・金宰佑 2000）ことに注目し、東大寺山古墳との関係を見ていくことにしたい[29]。

大成洞 13 号墳から出土した 6 点の巴形銅器は、12.0cm を超える大型品ですべて右捩りであり、渡りは見られない。井上主税（2008）は、列島では大型品は渡りのある 2 例（佐味田宝塚古墳、行者塚古墳）しか確認されていないことや、巴形銅器がまとまって出土する場合、通常は捩りが逆方向のものが数点含まれるのに対し、13 号墳ではすべて右捩りであることから、これらが列島で特別に誂えられた可能性が高いと指摘する。

また、13 号墳からは、巴形銅器とともに倭系遺物とされる鏃形石製品 15 点が出土している。列島で鏃形石製品が共伴している古墳は、東大寺山古墳、富雄丸山古墳、石山古墳、津堂城山古墳であり（表 4）、中でも 48 点を出土した東大寺山古墳が群を抜いている。

日野宏（2010）は、東大寺山古墳が古墳時代前期後半の鏃形石製品を最も多く保有することに加え、朝鮮半島南部との交渉でもたらされた（朝鮮半島南部の系譜を引く）鉄鏃の出土点数が国内最多であることから、朝鮮半島との対外交渉に被葬者が深く関わっていたと想像する。

東大寺山古墳出土の巴形銅器は全径 9.7～10.1cm、高さ 1.8～2.5cm の中型品で、左捩りが 5 点、右捩りが 2 点ある。重さは最も重いものが 99.0g である。一方、大成洞 13 号墳出土の巴形銅器は全径 12.0cm、高さ 2.5cm の大型品で、すべて右捩り、重さは 170g である[30]。13 号墳の方が大きく重いが、東大寺山古墳例も他の古墳タイプに比べれば大きく厚手であるといえる。

重量を度外視すると、脚側面の面取りや高さ、直線的な脚の付け根（図 9：○で囲った部分）など、13 号墳と東大寺山古墳の巴形銅器の形態は類似している点が多い。2 号墳（4 世紀後半）の巴形銅器と比較してみると、2 号墳例は全径 6.1cm と小型で、脚の付け根は直線的でなく滑らかであり、形態が異なっている。これに対して、13 号墳と東大寺山古墳の巴形銅器は共通のくせが認められるのである。

日本列島と朝鮮半島の年代に齟齬がなければ、4 世紀前半に築造された 13 号墳から定型化した 4 脚・円錐形座の古墳タイプ巴形銅器が出土したことは、それ以前に日本列島で定型化した古墳タイプが存在していたことを意味する[31]。すなわち、従来断絶期とみなされてきた時期に、過渡的巴形銅器だけでなく、4 脚に定型化した古墳タイプも製作されていたことを示唆している。

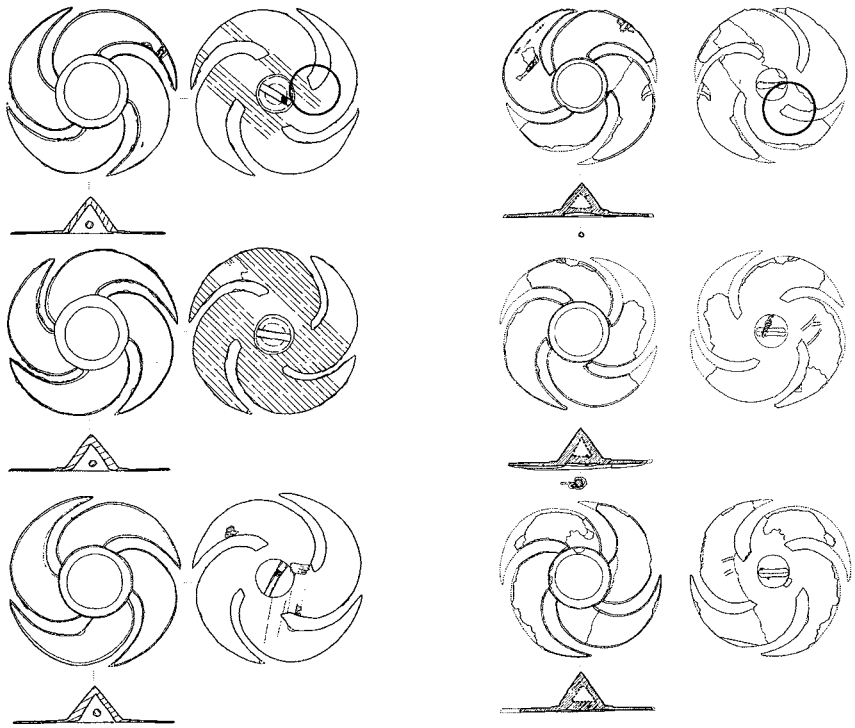
鏃形石製品や朝鮮半島南部の系譜を引く鉄鏃との共伴関係も考慮に入れると、13 号墳の巴形銅器をもたらしたのは、東大寺山古墳の被葬者であった可能性が高い。13 号墳の被葬者側が巴形銅器を特別注文したとまでは言えないが、13 号墳例は東大寺山古墳例と形態が類似しているものの、日本列島では稀な大型品であることを勘案すると、東大寺山古墳の被葬者が金官加耶国との交易のために特別に作らせたものという推測もできる。両者とも盾に装着されたと推定されていることから、巴形銅器とともに副葬形態も列島から半島へもたらされたと考えられる。

そして、興味深いのは、13 号墳では列島から巴形銅器がもたらされてすぐに副葬されたのに対し、東大寺山古墳では伝世期間を経て、前期後半になって新旧の遺物が混在した状態で副葬されたことである。東大寺山古墳に「中平」銘鉄刀[32]が副葬されていることは有名であるが、松林山古墳の鏡と同様、長期間にわたって伝世した品が前期後半に一斉に副葬されるという特徴が窺える。

表4　古墳タイプ巴形銅器の共伴遺物

編年	古墳名＼品目	鏡		玉類	石製品			武器・武具				
		舶載鏡	仿製鏡		腕飾類	琴柱	鏃	鉄剣	鉄刀	鏃	甲	冑
3期	松林山	○	○	○	○	○		○	○	◎80/10+	長 i	
	玉手山5号			○	○					◎2/8		
	東大寺山			○	○		48	○	○	◎261/70	革	
	富雄丸山	○		○	○	○	1	○	○	◎9/26	?	
	佐味田宝塚	○	○	○	○				○	○	?	
	真土大塚山	○	○	○				○	○	○51		
	銚子塚	○		○						○		
4期	石山	○	○	○	○	○	45	○	○	◎48/200+	長	小
	津堂城山	○	○	○	○		1	○	○	○	三	
	和泉黄金塚	○		○	○			○	○	●110+	三	三
	鳥居前	○		○				○	○	●	三	
	交野東車塚	○	○	○	○	○		○	○		三襟	三
	大塚越	○	○	○		○			○		三	三
	岩内3号		○	○				○	○	●66		
	行者塚 ii							○	○	●9		
	八幡ヶ谷 iii							○	○	●37		
5期	白鳥		○	○					○			
	丸隈山		○	○				○	○	●		
	千足		○	○				○	○	●		
6期	赤妻	○	○						○	●	長	

武器・武具の鏃　○：銅鏃　●：鉄鏃　◎：両方　　銅鏃数 /鉄鏃鏃
甲　革：革製短甲　長：長方板革綴短甲　三：三角板革綴短甲
三襟：三角板革綴襟付短甲　？：形式不明
冑　小：小札革綴冑　三：三角板革綴衝角付冑
i 鐘方正樹（2005）は、松林山古墳出土の短甲を方形板革綴短甲と考えている。
ii 行者塚古墳の時期は、「集成編年」では3期となっているが、報告書では5世紀前葉と報告されていることから（加古川市教育委員会1997）、4期以降に編年されると考える。
iii「集成編年」に記載なし。



1　大成洞13号墳例

2　東大寺山古墳例

3　大成洞2号墳例

（縮尺不同）

図9　大成洞13号墳と東大寺山古墳出土巴形銅器の比較

以上、4世紀前半という比較的早い時期に木製の盾に装着したとされる大成洞13号墳の事例と、木製または革製の盾に装着したとみられる東大寺山古墳の事例を検討した結果、両者の被葬者はすでに4世紀前半に交易を行っていたと推定される。東大寺山古墳の盾の材質は不明だが、いずれにせよ当時期には、鞆だけでなく盾にも巴形銅器を装着していたと考えられる。前述のように、弥生タイプの過渡的巴形銅器である谷尻例は盾に装着された可能性があるが、木盾に巴形銅器を取り付けるという伝統は、古墳時代以前の社会に求められるかもしれない。

東大寺山古墳は、7点というまとまった巴形銅器の出土数や、中平銘鉄刀の存在、その他副葬品の豊富さから、3期の古墳の中では最も卓越している[33]。東大寺山古墳を中心とする鍬形石の分有関係（川西 1988）を加味して、現在の出土状況をふまえると、東大寺山古墳の被葬者が定型化4脚巴形銅器の生産・流通の一翼を担っていた可能性は高い。このように考えると、前期中葉に副葬されたとみられる玉手山5号墳の巴形銅器（鐘方 2005）も、3期に位置づけられる巴形銅器出土古墳

の中で最も優勢な東大寺山古墳の被葬者からもたらされたと推測することもできる。

出土状況が判明している最も古い時期の古墳（松林山古墳、東大寺山古墳、韓国大成洞 13 号墳）とその着装器物の関係から、5 脚の古墳タイプ過渡的巴形銅器と定型化した 4 脚の巴形銅器の一部は、見かけ上の断絶期に製作された可能性があることを指摘し、本節を終える。

6　おわりに

本稿では、巴形銅器が弥生時代～古墳時代（第一変革期）、古墳時代前期後半～中期初頭（第二変革期）の二つの変革期に存在したことに着目し、弥生・古墳社会の特質を読み取ろうと試みた。

第 2 節では、従来別々の系譜であるとみなされることが多かった弥生・古墳両タイプが同一系列上にあることを論じた。そして、過渡的巴形銅器の分布から、古墳タイプの製作地の比定を行った。北部九州で生み出された巴形銅器が、東方へ伝播していく中で形態的変化を遂げ、第一変革期には本州の諸地域で簡略化された 5 脚半球形座巴形銅器がみられるようになり、それらをもとに畿内で古墳タイプが集中的に生産され始めたと考えた。また、巴形銅器の型式変化と分布の検討から、諸地域の文物を取り入れてヤマト政権が成立していく過程について言及した。

第 3 節では、古墳からしか出土しない古墳タイプとは異なり、さまざまな遺構から出土する弥生タイプの性格を考察するため、弥生タイプを出土遺構によって分類し、検討を加えた。その結果、第一変革期には巴形銅器の使用形態に地域差がみられることが判明した。

第 4 節では、古墳タイプの出土状況や共伴遺物の分析をもとに、第二変革期の様相や社会的背景について考察した。古墳タイプは、4 世紀後半に辟邪や鎮魂の思想が強まる中で、器財埴輪や他の副葬品と一体になってそれを体現していたと捉えられる。そうした背景には、大型前方後円墳の移動や朝鮮半島との交渉が活発化したことなど、国内外での社会変動が想定される。

第 5 節では、第一変革期と第二変革期の間に位置づけられる断絶期について再検討を行った。まず、古墳タイプ過渡的巴形銅器である松林山古墳例が靫に装着された事実をもとに、古墳タイプの成立過程を考察した。そして、盾に取り付けられたと推定される東大寺山古墳例や韓国大成洞 13 号墳例の検討から、5 脚の古墳タイプ過渡的巴形銅器に加え、定型化した 4 脚巴形銅器の一部も、断絶期に製作されていた可能性を指摘した。これまで、古墳タイプは前期後半になって新たに登場すると捉えられてきたが、第二変革期に古墳で盛んに辟邪／鎮魂を表現するようになる前から、その素地となる巴形銅器が存在していたと考えられる。

巴形銅器は、出現期には末盧国や伊都国などの王墓に副葬され、第一変革期に、本州の諸地域へ 5 脚半球形座巴形銅器が広がる。そして、見かけ上の断絶期に、畿内で古墳タイプが製作され始めた可能性があり、第二変革期に（古墳時代前期後半以降）、辟邪／鎮魂思想が強まる中で、各地の比較的有力な古墳に副葬された。時期や地域によって使用形態に差が生じてはいるものの、その精神は弥生時代から一貫してスイジガイがもつ呪力に求められよう。

巴形銅器の出土数自体が限られていることもあり、推論に推論を重ねてしまった部分も少なくない。鋳型を含めた資料の増加に期待したい。さらに、青銅器全体の中での巴形銅器の位置づけや、

弥生・古墳時代を体系的に捉える視点も重要となってくるが、今後の課題として擱筆する。

註

1）鐘方正樹は、玉手山5号墳において巴形銅器が前期中葉に副葬された可能性を指摘し、断絶期の存在を認めていない（鐘方 2005）。また、近年、纒向遺跡で布留0式期と考えられる4突起右捩りの巴形石製品が出土した（森 2014、北條 2014）。これらを受け、巴形銅器に本当に断絶期が存在したか否かは再検討の余地がある。本稿では、第5節で断絶期について検討する。

2）弥生タイプは出土遺構が不明なものが多く、中には中世遺構から出土するものもあり、厳密にはこの時期に収まらない。だが、前期後半以降に築造された古墳から他の副葬品と共伴して出土し、形態的にも統一された後者との対比から、前者を弥生時代的様相を呈する巴形銅器とみなして、便宜上、このような分類を行った。

3）近年、鉄などをめぐってそれまで優位だった玄界灘沿岸地域と「畿内・瀬戸内連合」との争乱が生じ、前者を「制圧」した後者が広域の政治連合を樹立し、以後の政治的主導権を握ることになったという畿内主導説（都出 1989、白石 1993）が後退し、「筑備播讃」など奈良盆地外の諸勢力が要衝の地である奈良盆地東南部に結集したとする諸地域主導説（寺沢 2000、北條 2000）が有力化している（下垣 2012）。

4）この時期に大型前方後円墳が奈良盆地から大阪平野に移動する現象については、政権交替があったとする説（政権交替論、河内政権論）や、政権の本拠地を奈良盆地に置いたまま、大阪平野に墓域だけを移動したとする説など、諸説ある。

5）第一変革期に位置づけられる巴形銅器は、後述する弥生タイプの過渡的巴形銅器（荒尾南例・谷尻例・乙亥正屋敷廻例・府中石田例）、第二変革期に位置づけられる巴形銅器は、松林山古墳例と伝香川県出土例を除く古墳タイプ巴形銅器すべてである（ただし、松林山古墳の築造時期は前期後半であるため、副葬年代について考察する際は第二変革期に含める）。これらの巴形銅器に着目して、弥生・古墳時代の社会を考察していきたい。

6）後藤（1986）は、谷尻例を脚の捩りが緩やかであることからⅢ類と区別し（Ⅲ'類）、古墳時代巴形銅器と併行させて考えているが、筆者は弥生時代後期前半から古墳時代初頭のものを弥生タイプとしているため、谷尻例も弥生タイプに含める。

7）半球形座で外縁に段があり、脚裏にも輪郭線が描かれた朝日例と宮平例も、鈕の形状（棒・橋状）は古墳タイプ巴形銅器に通じるものがある。本州出土の5脚形式はすべて、古墳タイプとのつながりがあると考えたい。

8）岡村秀典　1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集

9）伝世と表現される年代幅には、世代を越えることを示す場合と単なる長期間を示す場合とがあるが（森下 1998）、ここでは後者の意味で用いる。松林山古墳には他に、河北省易県で出土した方格規矩鳥文鏡の銘文と一致する三角縁二神二獣鏡が副葬されている。当古墳の出土遺物には、特異な流通形態を窺わせるものが多い。

10）本稿では、特に断りのない限り、過渡的巴形銅器は弥生時代から古墳時代に至る第一変革期に位置づけられ、5脚半球形座で簡略化した形態の荒尾南・谷尻・乙亥正屋敷廻・府中石田の4例（弥生タイプ）と、松林山古墳例・伝香川県出土例（古墳タイプ）を意味する。ただし、註7でも述べたが、弥生時代後期前半の朝日例なども形態上、古墳タイプとのつながりは認めたい。

11）山田良三（1970）は、直径5.6 cmの京都府三山木遺跡出土の異形青銅器（銅釦）の座径と、同じく半球形座をもつ桜馬場例巴形銅器の座径（脚含まず）を比較し、三山木出土銅釦の直径よりも桜馬場例の座径は小型であることを指摘している。また、福岡県布施ヶ里遺跡出土銅釦の直径は5.45 cmであり（大阪府立弥

生文化博物館 1997）、銅鈴の直径は半球形座巴形銅器の座径に比べ概して大きい。

12）先学が古墳時代に近い巴形銅器として挙げている五村例と国府例や、長瀬高浜例も、6 脚であるという点以外は、外縁に段がなく、脚裏が平坦で無文といった 5 脚半球形座の 4 例と同様の特徴を示すため、古墳タイプとのつながりが考えられる。本稿では、先学の見解を踏襲しながらも、5 脚形式のみが弥生・古墳両タイプに見られることに着目し、弥生タイプを整理した結果、5 脚半球形座巴形銅器はすべて本州から出土しているという事実を指摘した。そして、それらは九州出土の 6 脚半球形座と比べ簡略化が進んだものであり、九州から本州へと伝播する過程で生じた形態的変化であることを論じた次第である。

13）移入土器として一括したものの中には、他地域の土器が大和に搬入されてきたもの（移入土器そのもの）と、他地域の土器の特徴を明瞭に持ちながらも、技法、胎土などの面において大和で製作された可能性が高いものの二つがある（関川 1976）。

14）北條芳隆は、時期を少し広めに想定し、大賀編年前Ⅳ期までの間に収まることは確実だとしている（北條 2014）。

15）古墳タイプ初期段階の製作地を、纒向遺跡が所在する奈良盆地東南部に限定せず、奈良盆地西部・北部も含めた畿内のいずれか、もしくは複数の地に比定したい。

16）製作技術そのものが伝播したと捉えるのではなく、伝わった製品（弥生タイプ過渡的巴形銅器）の意匠を模倣して松林山古墳例のような 5 脚定型化前の巴形銅器が生み出されたと想定しておく。

17）古墳タイプが纒向遺跡で生産され始めたことを論じたわけではなく、同遺跡の先進性を説いたわけでもない。あくまで、搬入土器からみた地域間の交流や巴形石製品の出土といった事実をもとに、第一変革期には本州の諸地域に広がっていた巴形銅器が、古墳タイプになると分布が畿内に集中する過程を考察しようと試みたものである。

18）『発掘調査のてびき』（文化庁文化財部記念物課 2010）に、地表面を掘り下げた床面をもつ建物について、従来は「竪穴住居（跡・址）」とよぶのが一般的であったが、それらが必ずしも居住施設とは限らないこと、掘立柱建物や礎石建物などの建築学用語との整合を図る必要から、「竪穴建物」という用語に統一したとある。本稿においても、『発掘調査のてびき』に従い、報告書に「竪穴住居」と書かれているものも、「竪穴建物」に統一した。

19）『季刊考古学』131 では、「竪穴建物」研究の特集が組まれている。

20）古源盛一「巴形銅器が出土」朝日新聞 2015 年 6 月 2 日朝刊、25 面（鳥取県版）。

21）今後、第一変革期の墓から巴形銅器が武器・武具とともに出土する可能性もある。なお、先述の通り、弥生タイプには出土遺構が不明なものが多いため、甕棺墓出土以外にも、元々は墓に副葬されていた巴形銅器があるかもしれない。

22）土屋隆史は、津堂城山古墳と石山古墳の巴形銅器の一部は全径・座径・円錐体径・脚の配置がほぼ一致することを指摘し、同じ製作工房で製作された可能性が高いとした。さらに、両者は、石製模造品や玉も含めた器種構成が類似していることから、器物の入手ルートの一部を共有していた可能性を考えている（土屋 2013）。

23）行者塚古墳の内部主体は未調査のため、石山古墳のように棺内にも巴形銅器が副葬されている可能性がある。

24）韓国大成洞古墳群からは巴形銅器を含む多くの倭系遺物が出土しており、日本列島の古墳からも朝鮮半島からもたらされた遺物が出土している。

25）直弧文には辟邪の意味があるとされ、巴形銅器と直弧文が施された遺物との共伴例はしばしばみられる。和泉黄金塚古墳の木製刀装具や松林山古墳の鹿角製刀装具、石山古墳の木製刀装具、靫、靫形埴輪などに直弧文が施されている。

26）巴形銅器と有孔貝製品がともに盾に装着され、ツキヒガイがその代用品となったことは、巴形銅器の起

源がスイジガイに求められる有力な証左となる。そこで、仲津山古墳出土のスイジガイを刻文したとみられる円筒埴輪の存在（宇佐・西谷 1959）も巴形銅器に含めると、特定の古墳群で巴形銅器が継続して副葬された事例が認められないとする見解（田中 2000）は見直される必要があろう。つまり、古市古墳群の大型前方後円墳において、津堂城山古墳巴形銅器から仲津山古墳のスイジガイ刻文円筒埴輪へと、スイジガイによる辟邪思想が受け継がれたと考えられるのである。

27）革盾の創出については、橋本達也の論の援用である（橋本 2001）。

28）松木は B 類を「小形・厚手の鉄鏃、およびこれと同一の形態を持つ銅鏃。鏑を有することが多い。柳葉・定角・鑿頭などいくつかの種類からなるが、類型的・規格的で、個体差は小さい。数十本単位の大量副葬を基本とし、しばしば束状あるいは靫に納められた状態で出土する」と定義した（松木 1991）。

29）13 号墳の年代観の根拠は、洛東江の土器編年と木槨墓の形態であり、4 世紀第 2 四半期とされている（申敬澈・金宰佑 2000）。また、近年は大成洞 88 号墳からも巴形銅器が出土しており、今後、これらも含めて検討を行う必要があるが、東大寺山古墳例や大成洞 13 号墳例と比較すると小型である。

30）それぞれの計測値は、金関恕 2010、申敬澈・金宰佑 2000 を引用。

31）田中晋作は、巴形銅器には朝鮮半島から日本列島へもたらされたものが含まれる可能性があると考えているが（田中 2000）、すでに論じたように、筆者は弥生タイプと古墳タイプが同一系列上にあるとし、古墳タイプもすべて国産と考える。

32）「中平□□。五月丙午…」と金象嵌で刻まれた 24 文字の銘文をもつ大刀。「中平」は後漢末の年号であり、西暦 184～189 年にあたる。作刀から副葬されるまでに約 200 年を経たことが示される。

33）東大寺山古墳からは鏡が出土していないが、過去の盗掘で失われてしまった可能性がある。

参考文献

青柳種信　1930『柳園古器略考　鉾之記』東西文化社

赤塚次郎　2004「弥生後期巴形銅器の研究」『地域と古文化』地域と古文化刊行会

赤塚次郎　2008「弥生後期筒状・巴形銅器について」『考古学ジャーナル』570

安藤広道　2003「弥生・古墳時代の各種青銅器」『考古資料大観』6　青銅・ガラス製品、小学館

石野博信・関川尚功　1976『纒向』桜井市教育委員会

井上主税　2008「韓国大成洞古墳群出土の青銅製品について」『考古学ジャーナル』570

井上洋一・森田稔編　2003『考古資料大観』6　青銅・ガラス製品、小学館

井上義安編　2001『一本松遺跡』一本松埋蔵文化財発掘調査会

今尾文昭　1991「配列の意味」『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ 副葬品、雄山閣

岩本　崇　2008「筒形銅器・巴形銅器の製作技術」『考古学ジャーナル』570

岩本　崇　2013「さまざまな青銅器」『古墳時代の考古学』4　副葬品の型式と編年、同成社

宇佐晋一・西谷正　1959「巴形銅器と双脚輪状文の起源について」『古代学研究』20

梅原末治　1950「肥前唐津市発見の甕棺遺物」『考古学雑誌』36（1）

梅原末治　1973『佐味田及新山古墳研究』名著出版

大阪府立弥生文化博物館　1997『青銅の弥生都市―吉野ケ里をめぐる有明のクニグニ―』

大塚初重　1964「巴形銅器」『日本原始美術』4　青銅器、講談社

奥野和夫・小川暢子　2000『交野東車塚古墳〔調査編〕』交野市教育委員会

岡村秀典　1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55

小田富士雄　1974「日本で生まれた青銅器」『古代史発掘』5　大陸文化と青銅器、講談社

小野木学ほか　2015『荒尾南遺跡 B 地区Ⅱ』（第 8 分冊）岐阜県文化財保護センター

加古川市教育委員会　1997『行者塚古墳発掘調査概報』

橿原考古学研究所編　1973『富雄丸山古墳発掘調査報告』奈良県文化財調査報告書 第19集、奈良県教育委員会
柏原市教育委員会　2004『玉手山古墳群の研究Ⅳ―副葬品編―』
金関　恕　2010『東大寺山古墳の研究―初期ヤマト王権の対外交渉と地域間交流の考古学的研究―』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館
鐘方正樹　2005「玉手山古墳群の研究成果と諸問題」『玉手山古墳群の研究Ⅴ―総括編―』柏原市教育委員会
川西宏幸　1988『古墳時代政治史序説』塙書房
京都大学文学部考古学研究室　1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館
京都大学文学部博物館　1968『考古学資料目録』2、京都大学文学部
久住猛雄　2012『那珂60―那珂遺跡群第125次調査の報告―』福岡市教育委員会
熊本市教育委員会　2000『熊本市埋蔵文化財調査年報』3
蔵本俊明　2009『菊川市下平川の遺跡群』静岡県埋蔵文化財調査研究所
後藤守一　1920「巴形銅器」『考古学雑誌』11（3）
後藤守一　1923「再び巴形銅器に就て」『考古学雑誌』14（1）
後藤守一ほか　1939『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』静岡県磐田郡御厨村郷土教育研究会
後藤　直　1986「巴形銅器」『弥生文化の研究』6 道具と技術Ⅱ、雄山閣
小林昭彦　1996「雄城台遺跡（9次調査）」『大分県埋蔵文化財年報』4
近藤義郎　1983『前方後円墳の時代』岩波書店
近藤義郎編　1991『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社
近藤義郎編　1992『前方後円墳集成』近畿編/中部編/九州編、山川出版社
近藤義郎編　1994『前方後円墳集成』東北・関東編、山川出版社
西郷藤八　1925「遠江国寺谷銚子塚古墳調査報告」『考古学雑誌』15（10）
佐賀県教育委員会　1994『吉野ケ里』本文編、吉川弘文館
佐久間貴士ほか　1980『国府遺跡発掘調査概要・X』大阪府教育委員会
島津義昭　1982「巴形銅器二例―肥後の出土品についての報告と若干の問題―」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
下垣仁志　2012「古墳出現の過程」『古墳時代の考古学』2　古墳出現と展開の地域相、同成社
申敬澈・金宰佑　2000『金海大成洞古墳群Ⅰ』慶星大学校博物館研究叢書第4輯、慶星大学校博物館
申敬澈・金宰佑　2000『金海大成洞古墳群Ⅱ』慶星大学校博物館研究叢書第7輯、慶星大学校博物館
進村真之・宮地聡一郎　2005『海津横馬場遺跡―福岡県三池郡高田町所在遺跡の調査』福岡県教育委員会
末永雅雄ほか　1954『和泉黄金塚古墳』日本考古学協会
杉井　健　2013「漆塗り製品」『古墳時代の考古学』4　副葬品の型式と編年、同成社
杉原和雄　1970「鳥居前古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
杉原荘介　1971「巴形銅器」『考古学集刊』4（4）
鈴木一有　2012「有孔月日貝製品の類例と参考資料」『国立歴史民俗博物館研究報告』173
鈴木恒男　1959「巴形銅器―その一―」『國學院雑誌』60（1・2）
高橋克壽　1993「石山古墳の埴輪配置」『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館
高橋　徹　1994「桜馬場遺跡および井原鑓溝遺跡の研究―国産青銅器、出土中国鏡の型式学的検討をふまえて―」『古文化談叢』32
高畑知功ほか　1976「谷尻遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査 6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11、岡山県教育委員会

田尻義了　2008「九州大学筑紫地区出土巴形銅器鋳型の位置づけ―巴形銅器の分類と製作技法の検討―」『九州と東アジアの考古学―九州大学考古学研究室50周年記念論文集―』上巻
田尻義了　2009「弥生時代巴形銅器の生産と流通―九州大学筑紫地区出土巴形銅器鋳型と香川県森広天神遺跡出土巴形銅器の一致―」『考古学雑誌』93（4）
田尻義了　2012『弥生時代の青銅器生産体制』九州大学出版会
田中晋作　2000「巴形銅器について」『古代学研究』151
田中晋作　2009『筒形銅器と政権交替』学生社
土屋隆史　2013「津堂城山古墳出土巴形銅器の意義」『津堂城山古墳―古市古墳群の調査研究報告Ⅳ―』藤井寺市教育委員会
永留久恵　1967「対馬・豊玉村佐保発見の馬鐸・巴形銅器調査報告」『九州考古学』32
仁田坂 聡ほか　2008『桜馬場遺跡：重要遺跡確認調査概要報告書』唐津市教育委員会
仁田坂 聡ほか　2011『桜馬場遺跡(2)：重要遺跡確認調査報告書』唐津市教育委員会
橋口達也　2004「巴文と巴形銅器」『護宝螺と直弧文・巴文』学生社
橋本達也　2001「弥生・古墳時代における盾の系譜」『季刊考古学』76
橋本博文　2001「古墳時代の社会構造と組織」『現代の考古学』6　村落と社会の考古学、朝倉書店
長谷部善一編　2011『稲佐津留遺跡、西安寺遺跡発掘調査報告』熊本県教育委員会
鳩山町遺跡調査会・鳩山町教育委員会　2008『追ヶ谷戸遺跡』鳩山町遺跡調査会
波部忠重・小菅貞男　1967『標準原色図鑑全集』3　貝、保育社
林　　純　1980「滋賀県虎姫町五村遺跡出土の巴形銅器に就て」『土盛』11
菱田哲郎　1993「副葬品からみた古墳時代の前期と中期」『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館
日野　宏　2010「東大寺山古墳副葬鏃の群構成とその特質について」『東大寺山古墳の研究―初期ヤマト王権の対外交渉と地域間交流の考古学的研究―』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館
廣瀬　覚　2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
弘津史文　1928「周防国赤妻古墳並茶臼山古墳（其一）」『考古学雑誌』18（4）
福井県埋蔵文化財調査センター　2011『府中石田遺跡―舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査―』第1分冊―本文編―
福永伸哉　1998「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』12
藤田和尊　1993「鏡の副葬位置からみた前期古墳」『考古学研究』39（4）
藤田三郎　1988『唐古・鍵遺跡　第21・23次発掘調査概報』田原本町教育委員会
藤田　等　1965「巴形銅器を出土した西山貝塚調査概報」『日本考古学協会昭和40年度大会発表要旨』
文化庁文化財部記念物課　2010『発掘調査のてびき』同成社
北條芳隆　2014「纒向遺跡出土の巴形石製品に接して」『纒向学研究』2
穂積裕昌　2012『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣
松木武彦　1991「前期古墳副葬鏃の成立と展開」『考古学研究』37（4）
三重県埋蔵文化財センター　2005『石山古墳』第24回三重県埋蔵文化財展
三島　格　1973「鉤の呪力　巴形銅器とスイジガイ」『古代文化』25（5）
箕輪健一　2002「茨城県石岡市宮平遺跡出土の巴形銅器について」『婆良岐考古』24
本村豪章　1974「相模・真土大塚山古墳の再検討」『考古学雑誌』60（1）
森　暢郎　2014「纒向遺跡出土の巴形石製品について」『纒向学研究』2
森下章司　1998「鏡の伝世」『史林』81（4）
森本六爾　1929「巴形銅器考」『三宅博士古稀祝賀記念論文集』岡書院
柳沢一男　1986『丸隈山古墳Ⅱ』福岡市教育委員会

柳田康雄　1986「青銅器の創作と終焉」『九州考古学』60
山田良三　1970「三山木出土の異形青銅器」『日本古文化論攷』吉川弘文館
鷲見博史ほか　2014『荒尾南遺跡C地区』岐阜県文化財保護センター
和田千吉　1919「備中国都窪郡新庄下古墳」『考古学雑誌』9（11）

図表出典

図1～3：井上・森田編2003を改変。
図4：波部・小菅1967。
図5－1：鷲見ほか2014。
図5－2：鳥取県埋蔵文化財センター画像提供。
図5－3：福井県埋蔵文化財調査センター2011。
図5－4：高畑ほか1976。
図5－5：井上・森田編2003。
図5－6：後藤ほか1939。
図6－1：仁田坂ほか2011をトレース。
図6－2：永留1967をトレース。
図6－3：小林1996をトレース。
図6－4：進村・宮地2005をトレース。
図6－5：鷲見ほか2014をトレース。
図6－6：福井県埋蔵文化財調査センター2011をトレース。
図6－7：高畑ほか1976をトレース。
図7・8：筆者作成。
図9－1・3：申敬澈・金宰佑 2000 をトレース。
図9－2：金関2010 をトレース。
表1～4：筆者作成。

付　記　脱稿後、穂積裕昌氏のご教示により、岩本崇氏の「古墳出土巴形銅器の系譜と成立」（『山本暉久先生古稀記念論集　二十一世紀考古学の現在』六一書房、2017 年）が発表されたことを知った。岩本氏は、弥生系巴形銅器（筆者呼称：弥生タイプ）と古墳出土巴形銅器（古墳タイプ）の間に断絶を認め、古墳出土巴形銅器は、九州地方の弥生系巴形銅器をモデルに復古する指向性があったとする仮説を提示している。一方、筆者は、両者が同一系列上にあるとし、弥生時代から古墳時代に至る時期（第一変革期）に、本州へ巴形銅器のデザイン（意匠）が伝播する過程で型式変化が生じた弥生タイプ過渡的巴形銅器をモデルとして、古墳タイプが畿内で生み出されたと想定した点が異なる。

本論でも述べたが、北部九州の丸隈山古墳にみられる巴形銅器も、畿内の古墳出土例と同様に定型化した 4 脚円錐形座である。この点および現在の出土状況を勘案すれば、弥生時代九州から古墳時代畿内への一方向の影響関係だけでなく、弥生時代の北部九州に起源をもつ弥生タイプ巴形銅器が第一変革期に諸地域に広がる中で形態的変化を遂げ、それを模倣して畿内で生み出された古墳タイプが今度は九州に伝播するという、逆輸入のような過程を経たと捉えた方が、より整合性があるだろう。

（かわきた　なみ　三重大学人文学部2016年度卒業生）